
霊のはなし

川上 宏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霊のはなし

【Nコード】

N1656X

【作者名】

川上 宏

【あらすじ】

誰もが一番関心があること。死んだらどうなるの？

それらも含めて霊としています。

体験談をもとにして、占いとか、霊のおばちゃんとか、ユタとか、宗教とか、もろもろ書こうかなど。

死んだらどうなるの

死んだらどうなるんだろう？

誰もが考えることで、恐怖でもありません。

特に若い人は恐怖が強いと思います。

ただ歳を取ってくると怖いんだけど、その怖さが少し薄らいできます。

きつとこの感覚は若いときはわからないと思いますが、歳をとってきた人はなんとなく分かると思います。

死んだ後の世界はあるのか？

転生はあるのか？

天国や地獄はあるのか？

きつとそれは死なないと答えは出ないし、死んだ後の世界がなければ、死んだ瞬間、無いと思った瞬間消滅していますね。

この辺の考え方はちょっと深く考えられるのですが、それは後に置いておいて、やはり、死んだ後はこうなるんだという理屈より、体験談のほうが興味があると思うのです。

それも信賴している人の体験談ならなおさらです。

で、別に私がそういう体験があるというわけではないのですが、多少の不思議体験や、霊能者にあった時のこととか気功を受けたときのことなんかも交えながら進めて行こうかなど。

一番、私がそういう体験をしたのは発病してからです。

つづく、すぐ書くと思うけど。

68キロが半年で38キロに（前書き）

お気づきだと思いますが、ここで何も書かないのもなんだかなあといふことで気楽に書けるのを書くことにしました。

68キロが半年で38キロに

28年前、いきなり私は発病しました。原因不明、今は脳脊髄液減少症と病名は分かりましたが、当時はまったく分からず、食事がほとんど摂れず、頭は回るは、頭痛や吐き気や倦怠感など30以上の症状が出ました。

食事がほとんど摂れなかったので体重はどんどん減り、最後はアウシュビッツの囚人のようになりました。

見舞いに来た両親や兄弟はもうだめだと思ったそうです。

そのとき熟睡もできず、ほとんどとうとうとしている状態がつづきました。

眠っているのに周りの声が聞こえるなんていう体験もしました。

また目をつぶった瞬間トランス状態になっていました。

トランス状態というのは現実世界と幽界世界の狭間のような状況みたいなものです。

そのとき人生で一番死が近かったと思います。

漢方の先生にも診てもらっていたのですが、風邪を引けば体力が無いので死んでしまうから絶対風邪を引かないようにと注意され、風邪を引いている人が見舞いに来たら引き取ってもらいました。

そのときは一日中苦しかったのですが、不思議と死ぬのが怖くなか

ったのです。

死ぬのはかまわないけど苦しむのはいやだという感じでした。

怖くないからといって自殺したいというのは違います。

周りは死ぬんだろうなあと思っていたかもしれないけど、本人は絶対死ぬことは無いと確信していましたから。今思うと根拠は無いのですけどね。

でも体が限りなく死に向かっているとき生命エネルギーが消えかかっているときは死ぬのが怖くなるようです。

だから逆に言うとう死ぬのが怖いと思うときは元気なときです。だから若いときが一番怖かったと思っています。

今は8回の手術も経て脳脊髄液減少症に関してはほとんど治っているのですが、でも他の病気もあるけど、発病当時みたいな状態ではないので、死ぬのは怖いですね。

あの時、確かに死ぬのは怖くないと感じていたけど元気になるとその感覚は消えるようで、でも死ぬ瞬間は怖くは無いんだとは思っています。

なろう作家のブログやエッセイでも死のふちまで行った経験を書かれている方がいて、それを読むと、体が低温状態、もう完全に死の世界に足を入れようとしたとき、どんな様の声が聞こえ、そっこのほうに行くのいやだなあ文句のひとつも言っつてやれ見たいな感じで生還したらしいです。そのときも死の世界のほうに気持ちよさそうだと書いてました。

正確なことは忘れましたがそんなことが書いてあったと思います。

もう一人の作家さんのエッセイには死のふちのときもう一人の自分と会っていろいろ話をしたそうです。だから死は怖くないと思ったそうです。

このような話はテレビでも雑誌でも本でも同じようなことがいくつもあると思います。

ただ身近な人が言ったりやはりそういうのはあるのかなとも思います。でも最近の脳科学ではそういうのはみんな脳がしていることだそうです。

だから日本人だと三途の川が出てくるのが多いそうで、西洋だと天使が迎えに来るみたいな光景が死の瞬間現れるということですよ。

確かにそれはそうかもしれないけど、なぜ、わざわざ脳がそんな幻影を見せるのか？

人は常に死におびえていて脳がそれを和らげるために最後の瞬間至福にみちた世界を造るといえるのか？

なんかそれだけじゃあ納得できないのは私だけではないと思う。

ゲームの世界

パソコンをして、ワードを使い、もしくはブログなどを書いていて一番衝撃だったのは、一瞬に書いた文章が消えることだった。

あれほど苦労したのに、何かの手違いで消滅したときは唾然となったが、もしかしてこの世界もこれと同じなのと思うと限りなく不安になった。

私たちはこの世界でいろんな経験をしたり何かをしますが死んだらみんな一瞬で消えるのでしょうか？

すべて消滅したのならこの世界で楽しんだことも、苦しんだことも、何かを成し遂げた満足感も消えてしまう。

それどころか、人を殺すなどの犯罪を犯し、その罪悪感があっても同じように一瞬で消える。

全て消滅するのだから社会に利益を与えた人も損を与えた人も結果として同じになる。

もし、本気で100%死んだら消滅すると考える人がいたら、その人にとってこの世界は良いも悪いもないと思う。何をしても結果は同じなら自分の欲望に生きたほうが楽しめるだけ得なのではと考えるはずだ。

異世界ファンタジーのように召還された世界では人殺しも魔物殺しも異世界なのだから許されるみたいなおことと似ている。

異世界ファンタジーの魔物といったって、ほとんどの設定は獰猛な動物だからトラやライオンをちょっと獰猛にした感じである。

まるで初めてヨーロッパ人がアフリカに渡ったときライオンなどの肉食獣は人間に害するからといって殺しまわるのと似ている。

どっかの団体が目にしたら目を吊り上げて抗議するだろう。

でも異世界ならゆるさだろうと小説を書く作家が多い。

もしこの地球の世界も同じように考える人がいたら罪の意識なく人を殺すしレイプもするし強盗もするだろう。

と言うより、倫理観の教育をしないで自然のままに生きたら、動物と同じになり弱肉強食の世界になるから人殺しもレイプも強盗も何の罪なくできるはずだ。

人間社会は、社会を形成するにしたがって、そういうのを道徳とか法律で無くするようにしてきた。そのほうが社会が円滑に回るからだ。

特に宗教が大きな世界を持ち、死んでも違う世界があるから悪いことをすればその罪が続くみたいな教えを説く。

そのような考え方を洗脳されたのか人間は本能的に人を殺すと言うことはできなくなった。

でも中にはそういう洗脳とかに染まらない人も出てくるだろうし、本能的にこの世界は死んだら100%終わりだと確信している人もいるかもしれない。

それゆえ信じられない殺人などが起こることがある。

私たちの倫理観や常識だと信じられないが異世界に召還されたくらいの感覚ならそういう感覚もありえるかもしれない。

死んだら消滅すると思うが、だからこそこの世界で生きていたことに誇りを持つのだ、誇りを持つ生き方を死すれば己は消滅してもみんなの胸の中に永遠に生きづくだろうみたいなことを言う人もいる。でもよく考えれば時間の問題でいつかは忘れられた存在になっってしまうし、他人に残る自分の像なんてほとんど違っているはずだ。

つまり消滅すると言うのならこの世界で好き勝手に生きたほうが得だと言う理のほうが正解と言うこともある。

ここで二択が出てくる。

死んだら違う世界があるのかなのか。

死んでも違う世界なんてない、消滅だけだと答えた人はこの世界で己の利だけ求め好き勝手に生きたほうが良いだろう。

しかし、万が一死んだら違う世界があり、あなたの履歴が続いているとしたらどうなるだろう？

あなたの行動は大きなマイナスとなりその世界でどのようになるかわかりません。死んだとき、しまったと思うかもしれませんが。消滅ならそういうことも考えませんけどね。

だから万が一を考えるのならこの世界で人に迷惑をかける生き方はまずいと言うことになる。

つまり死んだ後の世界がある、ないにかまわず、万が一を考えたら好き勝手に生きるのはまずいだらうと言う結論になる。

この世界で生きる人がそのように考えなければこの世界はめちゃくちゃになるに違いない。

それゆえそんな理屈を知らない人でも何となく悪いことはしてはいけないと思い、何とかこの世界には秩序が保たれている。

と、数年前までは考えていたんだけど、最近、なるうの異世界ファンタジー小説を読んでいると、もしかしたらこの世界って本当にゲームの世界なのかもしれないと考えるようになった。

魂とか意識でも良いけど自分だと意識するものが永遠に続くのなら、退屈すると思う。

そこで何をしようかということ、この世界に入り色々なことをして楽しむ。

その色々なことは初めに自分である程度のことを決めておく。

野球のイチローみたいに生きたいのなら努力すればなれるようにインプットして生まれる、みたいな。

それならばみんなイチローを選ぶだらうと思うだらうが、そんなことはない。

何しろ永遠だからイチローみたいな人生は何回もやっているのだ。そしてクリアーしてしまったらその人生にはあまり興味がないう。

一般人だけど特殊な生き方を選ぶとか、まったく平均的な生き方を選ぶとかもイチローの生き方とゲームとしては同じになるのだ。

つまり、そのように考えるのならこの地球での生き方はものすごいあることになる。

そしてこの地球と言うゲームの最終点はクリアーかアウトだろう。

クリアーは、最高レベルの理がこの世界にいきたるみたいなことかもしれない。まあ何かしらの到達点があるのだと思う。アウトは温暖化とか原発なんかの事故によりこの世界が消滅するみたいなことかもしれない。

そしてゲームの長さが10万年とか1万年くらい長いゲームかもしれない。

参加者は、何回も転生して最終ゴールを目指しているのかもしれない。

現在地球には60億人いるとして、その人数全てが参加者ではなく、かなり人数がコンピューター上の作られた人間かもしれない。

参加者は1000万人とか100万人程度かもしれない。

なぜそう思うかというと、毎日同じ生活をして普通に暮らしている人が多いように感じるから。

私の住んでいる宮城島でもほとんど毎日同じ光景だ。

散歩すると同じ人がつりをして、畑をしてみたいに同じ光景を見る。そしてそれで満足しているように見える。

私も沖縄に移住してきて1年目は無我夢中だったし、2年目は落ちていて周りを見ることができたし、3年目は気がつかなくなったところの確認みたいなことだった。でも4年目だともう刺激がなくこの暮らしに飽きが来ている。

自分がおかしいのか周りがおかしいのか？

確かアメリカの映画でも似たようなことがあるよね。

赤ちゃんから成長するところを大きな舞台を造って、俳優たちがその中で演技をしてその赤ちゃんを見守るのを中継すると言うのを。

そういう感じにも似ている。違うのは俳優ではなくコンピューターで作られているのでアドリブはなく、決められた行動しかないということだけ。

もしそうだとして、ゲームを終えた世界はどうなっているんだと言う疑問も出てくるけど、宇宙の果てはどうなっているんだと言うようなことを想像してもわけがわからなくなるのでそこまでは考えられない。

ただそんなこともありえるかなと考えたわけである。

もしそういうゲームの世界だったら、当然過去に戻ることもできる。

でも、もし過去に戻る事ができたら、今の世界とはまた違う世界になるわけだから、そこに生きている人はその瞬間は全てコンピュータで作られる世界になるはずだ。

そしてある程度世界が作られていくとそこに行つてゲームを楽しもうと言う人が出てきて、ゲーム者もだんだん増えていく。

そのときに今の記憶があるのか、なくなる設定にするのかは分からない。ただゲーム者が、あそこからもう一度やり直したいと言うことも出てくるだろうから、そういう世界もできるようになる。

つてなると、この地球の世界のゲームも無限的に世界が作られるゲームになる。

何しろ永遠の時間があるのだから無限にあつても問題はないはずだ。永遠と言う時間からすれば10万年なんてたいした時間の長さではない。

最近のゲームの進み方。それを題材にしている作品を読むとそんなことを考えてしまう。

波動

原因不明の病気を発病してから8年くらいはまったく原因も病名も分からず、病院めぐりから民間医療めぐり、そして怪しげなところにも足を運ぶようになりました。

そこはもともと水関係をしている会社で、本を読んで知ったところでした。

そのころは玄米食などの食事療法や水が問題だといろいろな水をろ過する機械が売られていて、一応色々試していました。

基本の漢方や鍼灸、カイロプラクティク、マッサージなど一通りをして駄目で、一応世間で名の売れた先生、とか腕が良いと紹介されたところを回っていた。1000万円以上は使っていた。

それだけ回っても治るどころか原因も分からないし、もちろん治療後は少し体調がよくなると思うことはあった。だからこそ期待して1年以上通うなんていう羽目にもなるのだが。

そんな時、水関係でとても人気がある凄腕の波動水をやっている先生がいるから一度みてもらったらといわれた。

そのころ波動水は結構知れ渡っていたのだが、その中身が非常に怪しげでとても縁する気にはなれなかった。

空の雲を消すとかオカルトっぽかった。

でもこれも縁だと思い、試しに伺うことにした。

波動の先生は想像していたのと違い、若くて明るい先生であった。

そして私の話を良く聞いてくれて、私のプライドをくすぐるようなことをたくさん言ってくれた。

波動の説明を受け、理屈は納得できた。

その理屈はあくまでも推測が主となってはいるけどね。

そのころはやった脳内革命と同じでちゃんとした理屈があるようで推測の理屈と言うやつ。

その理屈と言うのは、私たちの体は波動を出していて、それは臓器などいろいろな場所から出している。

正常な体だと正常な波動を出しているが病気になると病気の波動を出し、それを共鳴の原理を利用して、悪い波動に良い波動をぶつけて中和させて治していくというような説明だった。

そして、その波動を測定するのにパソコンを使い、手を合わせ、キユツ、キユツと波動地を検査していった、その結果を水の中に入れて込んで波導水を作っていた。

その波動水を飲んでも、結果としてはまったく体に変化は起きなかったし、原因も掴めなかった。

ただその先生は、はっきり分からないものは分からないと言ってくれたし、自分の患者で治せないのは二人しか今までいなくてその一人が私だといった。そして、原因がひとつではなく複合的だとも言

った。これは当たっていた。

効果はなかったがその先生と話すときだ、ぶすつきりしていたので数年は通っていたかもしれない。通ったところは1時間半で1万円だった。が、その後予約を取るのも難しくなり1時間1万5千円になった。がん患者などが多く通っていたみたいだ。

そのときその先生に食事には陰陽があるから、それをわきまえて食事をするとうまいと言われ、それは今でも参考にしている。

そして効果はなかったが、おかしなところを当てるのは結構あった。

一番は歯で、昔治療をしたとき、水銀を使われるのは絶対いやだった。で歯科医にそのことを話し、絶対水銀が入っているものをかぶせないようにお願いして治療をした。

それなのに波動で調べると水銀が出てくる。指で外から触って右上奥の2本がそうだと云う。

見てはいない、皮膚の上から軽く触って検査しているだけだ。

そんな馬鹿など、昔行った歯医者を探ねると数年前にもかかわらず記録が残っており、確かにその二つにアマルガムを使っていたのが分かった。

あれほどはつきり言って、歯科医も納得してくれたのに使っていたのだ。そのときは5〜6本治療をしていて、その2本以外はアマルガムは使っていなかった。

そのときの歯科医も誰か分からなくなっていたし、文句を誰に言っ

てよいか分からなかったし、大体文句を受付もしないだろうから、おとなしく帰ったが腹ただしかったけど、波動の力に驚いたものだった。

だから波動というものをちゃんと研究していったらかなりのことができると思うけど、今はまだ発展途上だと思う。

何しろ、脳脊髄液減少症を見つけることができなくても仕方がないが、結石や前立腺炎症などは一般的な病気なのだから分かった筈である。

そのころに前立腺炎症の病状が分かっていたればかなり病状が和らいでいたかもしれない。

ただ人が波動を出しているのは確かだろうし、それは科学的にも実証されている。ようはそれをどのように捉え、医療に貢献できるか治療にはまだまだ時間がかかるかもしれないが検査には有効だと思う。

そして検査のためにはそれだけの情報が必要で、たとえば私が通っていた波動の先生のところには脳脊髄液減少症の情報がないために検出することができなかったのだろう。きっと前立腺もなかったのだと思う。

癌とか特殊なものの情報が主体で、前立腺などは病院で分かるし治療も難しくないので、情報がインプットされていなかったのかもしれない。

さてこれをオカルトと見るか、医学や科学と見るかであるが、オカルトに入れると、霊の世界にも通じていく。

私はオカルトに入れないほうが発展すると思う。

波動と霊はどうかでつながっているかもしれないが、波動の存在が分かってもそれが霊の存在が分かるとは思えないから。

つまり波動はあると確信できるが霊は確信できないということである。

霊のおばちゃん

病院めぐりも、民間療法も、結局病気の原因も見つけられなかった。

ある日、歌手で友人の人から「とてもよくあたる霊能力者がいるから、病気の原因が分かるから行ってみたら」と言われ、

そこまではと思うのと興味と両方が混在し、行くことにした。

山手線のちょい上のほうのアパートの1室に紹介された場所があった。

よくあるアパートの台所が待合室だ。

かなりお客さんがついているらしく、予約者しか入れないようだが、私の前も後もきっちりお客がいた。

時間が来て6畳くらいな部屋に行き、もちろんすぐ隣だけど、それゆえ台所の待合室にいても話しているのが聞こえてくる。

部屋の中は中国の派手な神様を祭っているような感じで、霊能者と言っより宗教のような感じでもあった。

もちろん大きな祭壇がありました。

霊能者は、普通に見たらただのおばちゃん。

席に座り、生年月日とか家族構成などを話す。

するとこの霊のおばちゃん、私に凄く興味を持った感じで嬉しそうに色々聞いてきたり説明をしてくる。

兄弟が問題なのが多いんですよと言うと、「当然です。ものすごく強い、只者ではないですから」みたいな言葉を返してくる。

私には兄弟が多いので、個性の強いのもいるし、普通の世間的な兄弟もいる。そして普通の兄弟に関しては普通ですなみたいなことを言う。

かなり、当たるなあと私も引き込まれていく。

もちろん極力、情報を与えないように気をつけていた。

信じるより疑うほうが強かったから。

兄弟だって名前と生年月日くらいしか情報は与えなかったけど、結構当たっていた。

そして、後でも思うのだが、腕の良い霊能力者は話がうまい。

喋っていると私を気持ちよくさせてくれる。

これは前回書いた波動の先生も同じだ。

心療内科の医師よりよっぽどましである。

心療内科の医師でももちろん立派な医師もいるだろうが、私が診ても

らった医師は最低であった。お前が心療内科に行け見たいな医師であった。

うつなどの精神治療はまず患者の話を聞いてあげることが第一なのに、まったく聞こうとしないで自分の自説だけを押し付けようとしてくる。

それに比べればこの霊のおばちゃんは、私の話をとても興味深く聞いてくれ、もうそれだけでも代金分はあるかなと言う感じであった。

さて、その霊のおばちゃんのやり方は、和紙を置き、筆を持って神様が降りてきたらそこに絵を描くというものであった。

絵は基本的な絵を毎回描き、そこに色々載せて行く感じで進めていく。

絵を見てもなんだか良く分からない。そこで説明してくれたり、質問に答えてくれたりする。でもあまり絵は関係ないんじゃないのと思うくらい色んなことを話してくれる。

私の実家に橋が架かっていますねと言うようなことも当てた。

良くそんなことが分かるなあと、霊能力の存在自体はあるんだと思っただ。

もちろん外れることもあったが当たる確率のほうが大きかったし、橋が実家の家に架かっているなんていうことを当てるのはかなり難しいだろう。

何しろ実家専用の橋だから、そういう家ってなかなか無いはずだ。

そして、一番驚いたのが、そのころ私は付き合っている女性が珍しい時期が1〜2年あった時期で、そういう女性は現れまじかと聞いたところ、もう現れていますと言われたことだ。

まったく覚えが無く、それははずれだろうなあと思っていたのだが、確かに付き合っている意識は無かったが今の妻と出会った時期であった。

また、このことが原因で妻を意識したわけではなく、妻との結婚を意識したとき始めてこのことを思い出したのだ。

だから、かなりこの霊のおばちゃんに信頼をした。

ご先祖様を大事にしないといけないなんて今まではなんとも思っていなかったけど、今私がいるのは先祖が永遠に続いた結果であったと気づき、先祖がいなければ私も存在していなかったので確かに直接原因の両親と同じくらいの感謝をしなければいけないのだと分かった。

ただ、それもどんどんさかのぼると全ての生命がかかわってくるので全ての生命に感謝と言う宗教的なものになってしまう。

やはり直接的な縁以外は理屈は分かってもなかなか感情までついて行かないものである。

そして過去に関してはかなりの確立で当たるし、人物に関しても当たる。ただ将来のこととか、病気のこととはまったく駄目であった。

だんな様が台湾の方で除霊ができると言うことで1回してもらった

が、まったく変化は無かった。

その後、このような霊能力者と同じような感じの霊能力者とも縁をすることがあったが、ちゃんとしている霊能力者の共通事項は、時々楔で山に籠ったりの修行をするということである。

自分に世間の垢がたまると霊能力も間違った方向に進むのだろう。

間違った方向に進むと、それが自分にはねっ返るのだと思う。

実際、はねっ返っている有名霊能者も多い。

私は基本的には体験主義なので、興味があるのは体験することが多い。

そういうことでいえば普通の人の3倍くらいは色んなことを体験していると思う。

体験してから、これはこういうものだと言分なりの見解を持つ。

そこから出した結論は、霊能力は確かに存在するけれどそれが絶対ではないと言っことだ。

自分なりの理もあるから、それは次回以降おいおい書いていく。

沖縄のユタ（前書き）

ユニーク数も少ないし、お気に入りも少ないし、メッセージも来ないからそろそろ閉めようかなとも考えたけど、最近弱きだから、メッセージで楽しみにしていますともらい元気も出た。不思議だねえ。そついうメッセージひとつでもう少しがんばろうかなと思うのだから。

沖縄のユタ

霊のおばちゃんは何人か縁をした。

体験談を年代別に書いていっても良いんだけど、そういうのもただの記録になってしまうので、いきなり沖縄時代に飛びます。

沖縄と言えばユタが有名で、各部落に一人はユタがいると言われています。

ただ、よそ者にはユタを探すのは難しいです。

ネットで探してやっと一人見つけました。

それで会いに行くと、これがもう駄目でしたね。

私は相対しているときに、何となく目で通じているか通じていないか分かります。

まったく通じていないと感じたし、世間一般的なことしか言いませんでした。

つまりお客が誰でも同じことを言うやつと言つことです。

当然まったく当たりません。

もともとユタに対してはそういうもので、ユタの成立にしても国のノ口に対して民間のユタとして成立したのです。

民間ですからかなりいい加減なユタもたくさんいたみたいで、そのため民衆はユタ通いと言って色々なユタにお伺いを立てて、判断すると言ったことがあったそうです。当然お金も掛かり、ユタ通いとは散財するという意味もあったようです。

つまり昔からユタはかなりいい加減なユタが多かったと言ったことでしょうか。

それでも何かの祭りごとを部落でする場合は、昔はユタが仕切っていたようです。

今はそういう風習も少なくなっているようです。

沖縄に来たときはユタに対して特別な意識をしていましたが、色々知ることになり興味は失せていきました。

そんなある日、沖縄に私より少し前から移住してきたスピリチュアルの中心的人が（現在かなり沖縄では有名になっていると思う）「私が沖縄に移住するきっかけを作った人が沖縄で一番の霊能者なの、川上さんが住んでいる場所に近いところにすんでいるから一度訪ねたら」

と言ったので、しばらくしたときに訪ねていった。

もうまるっきしビジネスでしていると言った感じの事務所だった。

昔行っていた霊のおばちゃんのところ飾ってあったような祭壇はあったが、それ以外は色々な商品が受付においてあると言うか、商品棚のところ受付があるような事務所だった。

山済みにされているのはその霊能者が書いた本であったし、待合室で待っている間にその本を見てくださいと言われる感じで置いていかれた。

その本には特別に面白いことが書いているわけではなかった。

まあ普通なら買わないなあという程度の本であった。

はじめに霊能者の旦那さんが何とかと言う占いをしてくれた。

でも、ただの習った占いであると感じられ、その旦那さんは霊能力は無いだろうと思い、うなずいて聞いてはいたが興味はなかった。

じっさい、その旦那さんには何回か見てもらったけど当たったことは無かったし。

その次に、奥さんで紹介された霊能者にみてもらった。

この霊能者は今まで私が認めてきた霊能者と同じようなオーラはあったし、実際しゃべるのがうまい。

私をつまぐ載せてくる。

その霊能者はユタの血を引いていて、靈感があるときはものすごく当たるけど、常に靈感が降りてくるわけではないので、このようにビジネスの場合は決められている占いをするのだそうだ。

靈感は100%に近い感じで当たるときもあるし、50%以下のときもあるらしい。

それで行くと占いは80%位の確率があるので普段のお客は占いが主らしい。

でも私には特別興味があつたようで、普通の時間の2倍は掛かってしまった。

「私のほうが色々教えてもらったみたい」

なんて言ったけど、確かに話してたときはその通りなんだけど、本気でそう思ったら料金は取るなよと思つたけどね。

そして私に関してはよく分からないそうだ。分かる人と分からない人がいるようで、私自信それは納得していた。

霊能者といっても全てが分かるわけではなく、ある世界しか、つまり縄張りの世界しか分からないはずで、その縄張りにいる人間ならよく分かるだろうが、縄張りから外れた人間は分からなくて当然なのだ。

縄張りが大きい人はそれだけいろいろな人のことが分かるというところで、それは国だとか村だとかの単位で考えれば分かりやすいかもしれない。

首相と村長みたいなものだ。

そしてそれは神様のことにもつながっていくんだけど、もともと神様は小さな世界での神様が多かつただけで、それがどんどん吸収されて大きな神様が出てきたということ。

それはまたの機会に詳しく書くつもりです。

また縄張り外でも波長の合う人はかなり分かることができる。

霊能者の中には分からないくせに分かった振りをする者が多く、初めにあつたユタなどはまさしくそれで、それから見たらこの霊能者はまだ正直だから良いだろう。

それでも、私に関してはこれだけエネルギーが失せているから普通ならもう完全にアウトだけど、何か特別な何かがあるのかしら？みたいなことは言った。私の奥底にある何かを感じているようだった。私に関してはまったく駄目だったが、ある日、私の住む桃原の住民を連れて行ったら、驚いたことにその人の兄弟の名前をほとんど一発で当てた。

これは私も驚いた。

一発で当てるなんて天文学的な確率だ。大体兄弟の数を当てるのだからかなりの確率だろうし、その男、女の順番だって当てるのは難しい。

それを、名前まで当ててるのだから、これはなんと云ったらいいのだろう。

テレビに出てくる霊能者だってそこまで当ててるのを見たことは無かった。

もちろん、その桃原の住民はその霊能者と面識はない。はじめてあつた。

裏でつながっていたなんてありえない。

このように波長が合う人はほとんど分かるそうである。

この桃原の住民が特別ではないらしい。

えらい先生にも同じように当ててかなり驚いたそうである。

霊と宗教（前書き）

昨日、一昨日といつもの発作で苦しんでいました。><

活動報告がなくなったと驚いた人も若干いるかもしれませんが活動報告は非公開にしました。

霊と宗教

霊のおばちゃんのことを書いたが、霊的なことは古代から宗教にながっている。

霊を受ける巫女が皇子となり神子にもなったと思う。

それゆえ、霊の話をすると言つことは実は宗教の話をする事でもあるのです。

霊の声を聞くとか神様を降臨させるとかは古代では自然に対して行われたと思います。

例えば豊作を願うみたいな。

それが村から国へと拡大されていくと政治に関わってきます。

国が大きくなるとその神も一神教になっていくのは世界共通だと思います。

国が豊かになると商業的な宗教が現れます。

つまり信仰が貴族から民衆、特に商人に移ると商業宗教が増えていきます。

商業宗教だけでは信者が増やせない場合はやくざ宗教が出てきます。

やくざ宗教とは脅かす教えです。

例えば信じなければ地獄に行くというようなやつです。

これらは良く考えれば分かると思うのですが、神が絶対的な自愛にあふれていたら信じるものも信じないものも同じように扱うはずで

常識だと思うのですがこの常識をどんなに偉い人でも疑問におもいません。

親鸞が唯一そのことを言っていたかもしれせん。

いわゆる悪人成仏です。

善人が救われるのならなおさら悪人は救われると言う説法です。

この説法をほとんどの人が誤解して悪人が成仏できるのか、それなら悪人になったほうがいいではないかと。

実はこれはそういう意味ではありません。

親鸞の時代、善人とは、仏教を信仰している人を指しました。

仏教を信仰している人とは、貴族や武士のことです。

大衆には仏教は浸透していなかったために、仏教を信仰していない悪人とされていました。

つまりあんな傲慢な貴族や武士でも成仏できるのなら、人が良い農民たちが成仏できないわけがないだろうと言う意味です。

言葉だけ独り歩きして、まったく違う意味に捉えられてしまうのは、日本ではよくあります。

私もそういうことは良くあり批判されたりします。

ちゃんと中身を考えると、言う思考が日本人は欠落しているのかもしれない。

そして親鸞は親鸞の師匠、法然が「南無阿弥陀仏と唱えれば極楽浄土にいける」と言う教えを、もつと飛躍させて、仏に差別はない、南無阿弥陀仏と唱えなくても人はもう救われているから誰もが極楽浄土に行けると教えます。

つまり、信じなければ救われないではなく、仏が絶対的な慈悲を持つならそんなことも要求しないだろうと言う論理です。

このような親鸞の教えは、実はどんどん廃れていきました。そのままだったら今の時代には伝わらなかつたと思えるほど廃れたのです。が蓮如が出て、親鸞を宗祖とした浄土真宗を宗教団体にしました。

宗教団体になると教えも変貌します。親鸞の教えがなくなつたからこそ、戦国時代、武力を持っていったと思われれます。

宗教は宗祖の教えと宗教団体になつたときの教えは著しく変貌します。

つまり宗祖を利用すると言うことが多いようです。

死人に口無しですから。

その辺はまたおいおいと書きます。

このように霊と宗教は同じようにつながっていますが、私は宗教の必要性は今の時代なら仕方がないと思っています。

依存する人があまりにも多い、精神が自立できない、枠の中に入りたがると言うような人々があまりにも多いからです。

宗教に入ることにより生き生きする人は大勢います。善行をしようと思う人も大勢います。つまりそういうプラス効果もあるので一概に否定はできません。

ただ、政治に関与する、脅しをかけるだけは理解しようとは思いません。

宗教は宗教、精神世界にとどまるべきで、また神の名をかたり脅すなんて最低のやくざ行為です。

昔人気者になった占い師のおばちゃんの「地獄に落ちるぞ」はお前が落ちると言いたい。

こういうのは言われてみれば、当たり前の理だと分かるはずです。

その当たり前の理が宗教や霊の話になるとレベルが高い人でも分からないのです。

法華経（新興宗教と法華経）（前書き）

霊の話から宗教の話に移ってしまいました。気ままに書いているのでどう飛ぶか自分でも予想できません。

今、書きたいものから書いていこうと思っているので文脈が乱れると思いますのでご了承ください。

また、10年位前勉強したのを書いているので間違った記述もたくさんでると思います。

調べなおせばいいのですが、それはもうどこに書いてあったか忘れたものが多く不可能ですので間違った記述を見つけた人はこっそりメッセージで教えてください。

法華経（新興宗教と法華経）

政治宗教ややくざ宗教、商売宗教と並べ立てると、日本にはそれ全て兼ね備えた有名な宗教団体があるのはほとんどの人が知っていると思います。

その宗教団体が信仰しているのが法華経です。

そして日本で一番信仰されている経も法華経なのです。

創〇学会だけではなく靈〇会や立正〇〇会など大きな宗教団体も法華経信仰です。

戦後、成長した新興宗教が法華経系ということですね。

そして不思議なことに各宗教団体の教義は批判が相次ぐのに法華経批判と言つものを私はみだことがありません。

もちろんどこかに存在はするのですが、目に付くところでは見ないと言う事です。

宮沢賢治なんかも絶賛していますしね。

日本の法華経の場合、日蓮の教えからの法華経を信じている人が多数です。

日蓮は法華経を国教にしろと働きかけた僧で、蒙古が攻めてきたときに日本の礎とか柱になると、つまり日本を守ると訴えたために、日蓮の法華経は国粹主義と思われ、右翼が信望したから、怖いと言

うイメージが広がったのではないかと推測するのだけれど。それゆえ批判は怖いと。

つまり皇室を批判するのと同じ怖さがあるのではないかと推測する。創〇学会。の前身は創〇教育学会と言う名称で、初代会長は小学校の校長先生だった。しかし、右翼の士でもあったから法華経を選んだのは納得だろう。

ちなみに2代会長はビジネスの人で、初代の生存時は理事長としてお金のことをすべてやっていた。

脱線かもしれないけど話を続けると、この2代は、何度も商売に成功したり失敗したりする。そこであることを思いつく、創〇学会の会員が増えれば、その会員を相手にすれば商売が安定するし儲かるだろうと。

そこで、商売がどん底に落ちたときに決心をして大折伏を始める。

この2代は商売が上手だから会員を増やすのも得意だったようだ。

蓮如と同じように、信者獲得のために難しいことを言わないで「あなたは今幸せですか、南無妙法蓮華経と唱えれば幸せになれるんです」と言う簡単な台詞を使った。

戦後だから幸せな者などほとんどいない。

単純だけど効果があり、ものすごく信者を増やした。

そして軍隊方式を取り入れ、階級を作ったので、会員の信者獲得は

争うようになり、それも信者拡大の原動力になった。

戦後間もなかったからこそ受けいられたやり方だろう。

2代は信者が増えると金貸しを始めた。裕福な会員から金を借り、それを会員に貸し付ける。

情報は会員から入ってくるから返せなそうな会員には貸さないから儲かって仕方がなくなる。それでも返せない会員には家財道具まで持っていくなどの話も伝わっている。そのとき活躍したのが3代で、つまり3代が、2代の金庫番みたいな役目をしたから3代は金回りが凄く良くなった。

2代は後継ぎとなる3代会長を今の3代ではない人物を考えていた、と言うのは有名な話である。その人物は学者肌の人物で、初代を思い起こしていたのかもしれない。それゆえ汚い仕事は一切つかさないで、新聞社の責任者とか表舞台のエリートコースを歩まさせていた。つまり今の3代には汚いことをさせていた。

2代は初代会長の補佐を理事長として支え、汚いこともやったから、理事長はそういう役目だと思い、後の3代を理事長にし、初代のような学者肌を3代にしようと考えていたのではないかと推測する。

ところが2代が突然死んでしまったので3代が巻き返しを図った。お金を握ると言うことは実力では組織で一番だったので、長老たちをうまく巻き込んで。時間をかけて3代に指名された。

2代が学者肌の人物を3代にしようとしていたのは周知の事実だったろうが、実践派が多い中で学者肌は嫌われたのかもしれない。つまり2代の思いより現実的な力を持っている者を長老たちは選んだ

のである。取り込まれたともいえるけど。

実は驚くかもしれないが2代が会長るとき、創○学会は信者からお金を取らないことを売りにしていた。

他の宗教はお布施とかお金がそれなりに掛かるのに、創○学会は基本的にお金は掛からないと。それも魅力に感じた信者も多かったはずだ。

2代は信者を会員としてビジネスをすればお金は何とかなると思っていたのだと考えられる。

だから、完全に商売宗教を目差していたし、日蓮の本願は法華経の国教だから政治にも進出しようとしていた。当然、他の宗教を信じれば地獄に落ちると言っていたのだから、やくざ宗教でもあった。

初代のときは、教育者で右翼だったから、政治は目差していただろうが商売はなかった。やくざは多少はあったと思う。

3代はそれを拡大して行き、とうとう日本の政治に影響を与えるところまでなってしまうた。

それではその法華経の教義とはいったいなんだったのか？

それは次回かな。

法華経（組織になると教義は変わる）（前書き）

法華経の中身を書こうか思っていたんだけど書いていくと違うことを書いてしまっている。書いていくとすぐ脱線してしまうんだよなあ><

法華経（組織になると教義は変わる）

日本で一番信者が多い法華経。

やはりすばらしい教えなのだろうか？

例えば法華経信者に法華経は何が書いてあるのと聞いたら「宇宙の根本が書いてある」とか下手すると「世界平和が書いてある」「なんていう人もいるかもしれない。

では宇宙の根本って具体的にどう書いてあるの？とさらに説明を求めると「宇宙の中心が南無妙法蓮華経なのだ」みたいな答えが返ってくるかもしれない。

つまり良く分からないと言うことだ。

法華経信者が法華経の中身を知っているとすることはまずありえない。ただ、法華経が一番すばらしい教えだと信じているだけだ。

つまり信者であり、信仰であるということでもある。

信じると言うのはある意味バクチみたいなものである。

自分本人だけが納得して信じるのなら、これは許されるかもしれないが、他の人を誘うのはこれは普通に考えてまずいだろう。

例えば株取引で考えてみよう。

株の情報をどこからか仕入れてきて絶対あがると信じて買うのはOKだが、その情報を信じると言って人に勧めるのはNGだろう。

確かにその情報が当たって株があがれば感謝されるが、外れれば恨まれるのである。

これは経験からも言える。

信者は100%当たると信じているから他の人を誘おうとするが、信じると言つ時点で100%ではないのだ。

つまり、どこかの宗教の教義を聞いて素晴らしい信じてみよう、と言つことで信者になるのはOKだろうが自分が信じたからあなたも信者になりなさいと薦めるのはNGということである。

信者になるのを薦めて断られたならまだいいのだが、もし入信などしたらその人の責任まで負ってしまうのだ。

そこの教えが間違っていたのなら負債が2倍になると言つことである。

そして全てと言つていいほど宗教団体の教義はおかしいので教えは間違っているといっても言い過ぎではない。ただ、宗教団体によって力の大きさは違つので力から来るエネルギーを受けることはできるかもしれない。

教義ではなくて、そのエネルギーを良しとするのなら、それはそれでOKだが。

「全ての宗教団体の教義はおかしいと言つのは言いすぎだろう、確かに私が信じている宗教団体以外の教義はおかしいが」

と言う信者の意見も当然あると思うが、その意見が全ておかしいと言う根拠にもなる。

そしてよく言われることだが開祖の教えと宗教団体の教えとは違っている場合がほとんどだ。

宗教団体になると、宗教団体維持のため教義がどんどん変貌する。

教義変更の有名なところは前回書いた、創○学会だ。

創○学会の2代会長は「日蓮○宗が存続するためなら創○学会が潰れてもいい、創○学会は日○正宗を守るための団体だ」と言っていたのだ。

これは創○学会の古い会員なら全ての会員が知っているはずである。

日蓮○宗は唯一日蓮の教えを正当に続けている寺院だからだと言うのがその根拠で、初代が日蓮○宗を選んだのもそれが理由であった。

つまり創○学会の存在理由が日蓮○宗を守るためだと言うのが古い会員は常識として知っているはずである。

それが今では創○学会は日蓮○宗を一番の魔物のように言っているのだ。

これは組織維持のためなら教義を真逆にしても構わないと言うことでもある。

つまり宗教団体にとって教義はそれほど重要ではなく一番重要なのは信じると言うことなのだ。それゆえ、信者になれと言うのだ。

マザーテレサの話でも同じようなことがあつたらしい。映画しか見てないのでなんともいえないが。

ただその映画では、マザーテレサが組織が拡大したために初期の志が失われ、組織維持の方に組織の決定事項がなつていくのを憂いて、組織を無視して初めからやり直そうと言う姿を描いていた。

これが事実ならさすがマザーテレサである。

重要なのは組織ではなく、初めの気持ちなのだ、そしてそれがための行動なのだ。組織維持より困っている人を助ける方を選ぶのだ。

組織が大きくなると初めの志は失われ組織拡大とか維持に組織は動いていき、そのため、宗教なら維持とか拡大のための教義が作られていく。

これは仏教の始めのころもそうであつた。つまり組織のための教えが発生して行つたのである。

法華経とは釈迦が亡くなつてから、数百年後にできた経である。つまり仏教組織が確立した後にできた教えであるとも言える。

つまり組織の教えであるとも言える。

法華經の中身

法華經の説明をしようとするとき、最低でも「日蓮と法華經」「伝教と法華經」「天台と法華經」「鳩摩羅什と法華經」「提婆達多と法華經」「法華經成立の時代」程度は説明しなければならぬ。

ただ、こういう特殊な話は興味を持つ人がほとんどいないので、書いていくと、どんどん、ここも人気がなくなるだろうなあ。ユニーク数が30を切ったら止めてしまいかもしれないから、どこまで書くかは分かりません。

でも、おかしなことに法華經を信じている人は日本に1000万人以上はおそらくいると思う。

しかし、それだけの人数がいても法華經の中身に興味を持つ人はほとんどいない。

いや、多少はいたんだろうけど、法華經とか仏教を知ろうと勉強すると難しくてあきらめてしまっただと思う。

本当は難しくないとと思うんだけど、難しく書いた方が権威があると思うのか、難しく書く人ばかりなんだよねえ。

そしてやさしく書いてあるのは、信じましょうをメインとしているし、御伽噺のようなことを書くから、そういうものだと思ってしまう。

でも、本質はそれほど難しいことではない。

その、それほど難しくはないというところまで到達するのが難しいだけである。

さて、今回は肝心の法華経に何が書いてあるかだ。

実は、何も無いというところが正直なところだろう。

28品もあって何も無いはないだろうと思う方もいるだろう。

確かに、色々なことは書いてあるけど肝心なことは何も書いていないから何も無いといっても良いかなと言うところだ。

で、これは私が言っているのではなくちゃんとした法華経研究家の一致した意見だとも思う。

例えば有名な般若心境だと色即空みたいな教えが載っている。

でも法華経にはそれが無いのだ。

なぜないか？

法華経の中に「この教えは仏と仏しか分からないから説いても無駄」と言うのが載っている。

つまり仏以外は分からないのだからこの娑婆世界で釈迦が弟子に説いても無駄だと言うのだ。

まあ、そこで終わったら、弟子たちも満足できないからそこを何とか説いてくれと懇願するんだけど、そこで釈迦は今までの教えは全

て方便でこの法華經こそ真の教えであり、今までの仏もこの法華經によって仏となった。実はこの私も娑婆世界で悟り仏になったと思われるが実は久遠のかなた久遠実成にて法華經により仏となった。と言っんだ。

つまり、法華經が存在するからこそ、仏になれる。過去の仏たちもまた未来の仏たちもみんな法華經によって仏になった、ということを書いてあるんだけど、では、その肝心の法華經の教えとは何？

それは書いていない。

そして、この法華經を未来に広めるのは地湧菩薩だとか、観音菩薩が法華經を護持している人を守るとか、ものすごい先の未来、おそらく太陽系の寿命の何兆倍の先の未来において弟子たちも法華經によって仏となるだろうなんていうことが書いてある。

もちろん、何で方便を言ったのですかという問いの答えとかも載っているし、今まで本当のことを言わなかったと言う釈迦の言葉に怒って退出する人がたくさん出たなんていうのもある。

しかし肝心の法華經の教えと言うのは何も述べてない。

ただ、この法華經こそ唯一の釈迦の本当の教えであり仏教の最高峰の教えであると、自ら自画自賛しているだけなのである。

これは、最近新しく出てきた新宗教の教祖たちにも言えるかもしれない。

「俺が神であり、俺が絶対神である。絶対神の俺が言うのだから間違いない」

と言う論理である。

不思議なことにそれを信じる人が出てくるのだ。

論理より力を求める人が多いと言うことでもあるんだけど。

と言うより、ほとんどの信者は論理を求めていないけどね。

力を求めているだけだから。

いわゆる幸せになりたいとか天国に行きたいとか救われたいとか。

死んだ後のことは別として、ほとんどはお金が解決してくれそうなことである。

実際、高度成長期のときは、日本は豊かになったために、幸せを感じる人が多くなり、それを教団の信者になったからと結び付けて、爆発的な信者獲得になった。

どんな宗教でも良いから、その教団の教えって何？

おそらく今の社会的常識の論理程度だと思う。

憎むな愛せとか、社会貢献しろ、自分のことより人のことを大事に
思え、一人で苦しまないで助けてくれる人は周りにいるから。

そういう教えは確かにありだと思っけど、その宗教の開祖が言っ
ていたこととはだいぶ違っているとは思っただけだね。

日蓮と法華経（1）末法

鎌倉時代、新しい宗教がたくさん生まれた。これは学校で絶対習っていると思うからほとんどの人が知っていると思う。

禅宗の、臨済宗の栄西、曹洞宗の道元。念仏の、浄土宗の法然、浄土真宗の親鸞。時宗の一遍。そして日蓮宗の日蓮。平安時代の空海、最長を除けば有名な日本の僧はこの時代にたくさん生まれた。

なぜこの時代なのか？

それは末法思想がこの時代のエネルギーを造ったからだ。

日本に入ってきた仏教では釈迦滅後1000年間を正法時代といい、後の1000年間を像法時代と言い、その後の時代を末法時代といった。この末法時代は1万年とも永遠とも言われた。

そして、正像時代はまだ釈迦の教えが残るが末法時代は釈迦の教えが無くなり国は動乱に陥ると言われていた。

その恐れから新しい宗教がたくさん出てきたのだ。

これは1999年のノストラダムスの予言の時のエネルギーと似ているかもしれない。

いわゆる終末思想みたいなもので、人々の不安に付け入るか、答えるように新しい宗教が出てきたのだ。

ノストラダムスの予言に不安を持った若者がオー○とか、幸福の○

○に引かれていったと同じような現象かもしれない。

人々が不安になるときは不安エネルギーが渦巻き、宗教が生まれるようだ。

日蓮は末法には末法の教えが存在すると説き、釈迦の教えでは救われない、法華経でなくては駄目だと説いた。

法華経も釈迦が説いたのではないの？という疑問も当然起きるだろうが、法華経だけは釈迦が説いたのではなく久遠からあり、全ての仏は法華経によって悟ったのだから、法華経は釈迦が説いた教えではないという理屈なのであろう。

日蓮は盛んに末法を主張する。末法の時代は法華経でなくては駄目だと。

それまでの仏教は、経を比べ、より優れていると言う論議はあっても、この教え以外は全て駄目だと言う論議はされていなかった。

日蓮たちが修行の場としていた比叡山でも密教を取り入れていたし、今で言うと学校で習う科目が色々あるという感じであった。

もちろん科目によって受験に一番重要な科目とか、社会で一番必要とされる科目とかあると思うので、優劣みたいなものも多少は科目によってあると思う。

仏教の経もそのようなものであった。

それゆえ日蓮の、法華経でなくては駄目だ、法華経以外の教えは破棄すべきだと言う考えはとても特殊であった。

最も日蓮も一番の敵としていたのは念仏であり、禅宗にはそれほど攻撃をしていなかったようだ。後に書くけど禅宗は末法思想よりは禅の理論みたいなものを主としていたのだと思う。しかし、念仏は日蓮と同じく末法だからこそ生まれた教えだと言うからライバルみたいなものだったんだと思う。

日蓮の考えの根本となったのは末法思想なのだが、実は本当の末法は平安時代末期から鎌倉時代ではなく、室町時代から江戸時代始めなのである。

え、どういうこと？

と思う人も大勢いると思います。

末法に入ったから日蓮が生まれ法華経を広めたんじゃないの？と信者は思うよね。

実は違うんです。

続きは次回へ。

自動書記

最近では自動書記って何？と言う人が多いだろうが、ノストラダムスがはやる前にUFOブームがあり、そのときにアダムスキーが会ったといわれる金星人が残した不思議な言葉の解読を「UFOと宇宙」誌で発表したのが○水○〇氏で、その解読の仕方が自動書記であった。

その解読の前後から自動書記はかなり有名になっていて、後の幸○の〇〇でも使われていたし、その元となった高〇〇〇氏なども自動書記で霊界通信などをしていたと言われている。

実は「UFOと宇宙」誌で解読した○水○〇氏は昔、私の部下であった時期もあり氏の自動書記に関しては、私はよく知っている。

神がかり的な状態になり、手が勝手に動いて字を書くのだが、その字は判別不能である。それゆえ、書き終わったらなんて書いてあるのか聞かなければならなかった。

後年出会った霊能力者と同じ感じかもしれない。

書いてあること以上に霊能者はその情報を言うのだがその仕組みは分からない。

当時は面白がって色々な霊？を呼び出し質問をしたのだが、凄いと
言う答えが出たことは無かった。

例えば釈迦とかキリストを呼び出してもたいした答えも出ないし、
そのとききたいした質問も出来なかったというのもあるが。

それでも興奮したものだっただ。

今なら、かなりの質問をし、これは駄目だと思うはずだが、当時は
幼かったので、意味のある質問はしていなかった。

大体、インド・ネパールの釈迦やユダヤ人のキリストと日本語で
交信できるというのも何だが、その辺はイメージが来てそれを日本語で
訳している感じらしい。

つまりイメージだから翻訳も正確とはいえないと言うことでもある。

当時は興奮した自動書記もその存在は否定しないが中身に関しては霊能者と同じだと今は考えている。

つまりレベルや受信能力によって自動書記に書かれた事の真实性が違ってくると言うことである。

釈迦やキリストを霊交信や自動書記によって交信すると言うのは、全てと言ってよいほどおかしなものだと思う。

ちゃんと釈迦やキリストを調べれば、こんなこと言うはずが無いと言うことばかり述べるからだ。

それもかなり程度が低い。

何も知らない、または知ろうとしない信者たちは信じるかもしれないが、普通はあまりにもレベルが低いので無理だろう。

アダムスキーを信じるかどうかのレベルと一緒にある。

ただ、霊能力と言うのは中身のレベルの差はあるが、興味を持つ人も多いと思う。実際、手が勝手に動き出したところを見たら何が起こったのかと思うだろう。

未知なる物だから信じるしか手は無いと考えがちだが、ちゃんと検証すれば、明らかにおかしいと分かるものが多い。でも確かに確率論で言って、これが分かるはずが無いと言う霊能力も存在はすると思うし、実際、何回かそういうことも経験した。

でも経験したとしても全て当たるわけではない。全知全能ではないのだ。

そして釈迦とかキリストなんかが出てくるのはほとんどが眉唾である。

これは過去の宗教でもよく利用されたのと同じで、過去の偉人を宗教が利用して自分を偉く見せるための詐欺みたいなものだ。

気功とマイナスイオン

闘病中のかなり体調のひどかったとき、様々な民間療法をしたが、気功も友人から勧められて試してみた。

友人から勧められた気功師は中国人だった。

中国で一番のところで修行をし、免許皆伝みたいなことを盛んに言う。

後で知ったが、中国人の民間療法関係ってそういうのばかりみたいだ。

日本人に何を言ってもOK。どうせ調べようもないからと言うことだろう。

私はこのような民間療法に関しては疑うのと信じるのを5分5分にしている。

100%信じないからか、催眠療法などはほぼかからない。

ほぼと言うのはレベルの高い催眠師にかかったことがないから。

レベルの高い催眠師ならかかるかもしれないということだ。

そんな催眠師が果たしているのかなと言うことはあるが。

この中国の気功師も、偉そうなことを言う割りにはさっぱりであった。

何も感じないし、効果も感じなかった。

それゆえ気功ってそんなもんだらうと思っていた。

ところがある友人の紹介で知り合った気功師、気功師と言うより、縄文時代研究家で、私が病気のため気功も出来るから試してみるかと聞かれやってみただが。

この気功は気が来るのが分かったし、効果もでた。効果が出たと言っても治る効果ではなく、マッサージなどと一緒で流れが良くなると言う程度であるが。

それでも、そのころは、夜10時を過ぎると頭の脳が力チ力チに固まると言う症状に悩まされ、1時間くらいベッドで身動きもしないで寝転がっていくとだんだん溶けていって、溶け終って眠りにつけると言う毎日を過ごしていた。

この気功師に気功をしてもらうとこの力チ力チに固まった脳が溶けて、体もリラックスできるのであった。

私のひざから冷気がブワーと出ていると言われ、腿が冷たくなるのはひざが原因かと分かった。かといって、治るわけではなかったが。

この気功師と温泉とか神社回りをよくした。

そのときに、私は滝の近くに行くとマイナスイオンを感じることが出来た。

知り合いに招待されて那智の大滝に行った時も、かなり遠くからで

もマイナスイオンを感じたのだ。

もちろん今はまったく感じない。体がおかしかったから感じたのだらう。

私の体が一番霊的な状態だったとき戸隠神社に行ったのだが、そのとき山の中腹まで続いている参道の初めの方に結界があるのがはっきり分かった。

それが結界なのかははっきり言えないが、ある線を越えるといきなり神聖な感じになるのだ。

その線を戻るとざわざわとした、一般的な世界になる、いわゆる世俗的な感じになったのだ。

まるで国境線のような感じで線を感じた。

軽井沢の森の中からいきなり渋谷に出たような感じだ。

もちろん現在はまったくそんなことは感じない。沖縄のパワースポットに行ってもまったく感じない。

その気功師によると縄文時代は霊気の良い場所に磐座いわくわ、いわゆる神を祭る場所を作り、それが後の大和の神社がそこを利用したために神社は気の流れの良い場所などだそうです。

神社に行くとスーとした感じになるのはそのためのものである。

ニューエイジ

ノストラダムスは1999年を待たずしてブームは去ったように感じる。

終末思想を利用した新しい宗教団体は1995年の地下鉄サリン事件で一応の収束を見たのではないだろうか。

そしてそれに代わって出てきたのがニューエイジと呼ばれる人たちだ。

新しい時代と言うことだろうが、実際は古いものを取り上げているような感じである。

元々は1970年代から80年代にアメリカの西海岸から発生したようで、見た目はヒッピーの延長戦のような感じである。

伊豆とか沖縄なんかの暖かい自然があるところに住んでいる人が多く、野外コンサートなんかがあるとぞろぞろ出てくる。

東南アジアやインドの麻のカラフルな服をだぼって着ている人たちと言えば思い当たる人も多いかもしれない。

新しい宗教ではあるが、特定の団体も持たないし、指導者がいるわけではない。

すべてでひとつである。

偶然というものはない。

弟子の準備が整ったとき、師匠は現れる。

しなければならぬことというものはない。
善悪というものはない。

信じる必要はない。

努力はしなくてもよい。

与えたものが返ってくる。

すべてのものは聖なるものである。

人には無限の潜在能力が備わっており、自分で自分の現実を作る。

どんな現象も、自分がそれに与える以外の意味を持たない。（現実
は中立である）

などの思想があるようだが、これが全てではなく、色々な思想を入
れている。

お蔭様とか、みんなで念じれば世界は変わるとか、パワースポット
とか、助けはすぐそばにあるとか、縄文研究とか、基本的に何でも
ありかなという感じだ。

ニューエイジの思想とは思わないで、そのような教えが素晴らしい
なあと思ひ、そのような思想を信じている人も多いと思ふ。

そして、そのような思想は宗教ではないと思つている人も多いだろ
うが、これも新しい宗教と言えるだろう。

組織はなくても横のネットワークはあるようで、何かをやるときは
そのネットワークで呼びかけ集会やイベントなどを催している。

強い力の宗教にへきへきした人々がこのようなやさしい思想に入り
込んだものと思われる。

私も何回かそのような集会やイベントに参加したが、参加して感じ
たのはエネルギーがないということだ。

やさしさとか愛を求めているからなのだろうから、エネルギーや力は対極にあるのだろう。

ある意味、現代ではこのような思想を求める人が多い感じがする。

ただ、ゆとりのある人、いわゆる金持ちならそのような思想も良いかもしれないが、ゆとりのない人がそのようなエネルギーが無い思想に入り込むと、現実的な暮らしと言うものが重くのしかかってくる。

それゆえ、表面的には力に意味を持たないようにしているが、内面的には常に力を欲しているように感じた。

その力と言うのも単純にお金であるが。

私はこの世界は太陽を中心に作られていると思う。太陽のエネルギー、力である。

誰がこの世界を創造したかわからないが、太陽と言うエネルギーを中心として弱肉強食の世界を作り上げている。

つまり力の世界だ。

ニューエイジは自然を尊ぶが、その自然が力を中心としているのだ。小説家になろうのテンプレ作品も魔法と剣が主体となっている。つまり力だ。最強とかチートの主人公が人気がある。そして最強でチートならハーレムを作れる。

一応、人間性とか愛とかも入れようとしているが、まずは力ありき

なのだ。

若者が書く小説だから、エネルギーが有り余っている若者だからこそ、無意識にそのような小説を書くし、そのような小説が人気があるのだらう。

実は宗教も、教義より力を求めている信者がほとんどなのだ。

それゆえ教義はまるっきり分からなくても信じればよいとされている。

それゆえ教義は何でもよいと言うことになる。

だから宗教は駄目だという人も多いと思う。しかし、就職する企業にも就職者は力を求めている。

と言うかほとんどのものに人々は力を求めているのだ。

タレントなどのセレブも有名イコール力だと思っから綺麗な女性はたとえブ男でもそばに行きたいと思ってしまう。

引退した島〇氏も、誰が見ても美男子ではないだろうが、テレビ界に絶対的な力を持っていたために凄くもてただろうなと予想が出来る。

ブ男でもてたいと考えるのなら力を持つことが一番の早道だろう。

なぜならこの世界はそのように作られているからである。

生命を食べなければ生きて行けない様にプログラムがされているよ

うに、力に生命は集まるようにも作られているのだ。

キリスト教が愛を教えていると言いが、それを信じるのは信者くらいだろう。

自分たちの教えを信じないものを邪教徒として、過去には十字軍などもして力で存在を示そうとしていたのだ。

力を持たなければ教団は滅びていくのだから剣をもつてもそれをよしとする教義に納得するものがあるとしたら、それはやはりその力に依存したいからだろう。

宗教は教義よりも力

この世界は力が中心となっている、と言うのに反発も覚える人もいると思います。

ただ、それはこの世界をゲームと考えた場合、そのように設定されていると言った方が良くもしくれません。

若い人、この世界で何かをしたい人は力を持たなければその願いがかなわないようになっていきます。

ただ、歳を取り、この世界で何かをするより自分の幸せだけを考える、もしくは身近な者の幸せを考える、と言う、世界を小さくして身の回りのことだけでいいやと思うようになると、力は逆にいらな
いと言うこともあります。

これは若い人には分からない感覚で歳を取らないと分からないでしょう。

つまりエネルギーが無くなって来ると言うことですね。

草花を見ても分かるとおり、花が咲き誇っているときは、誰も
が賞賛しますが、枯れてくると、あれほど賞賛した姿に今度は嫌悪感を示します。

エネルギーがなくなると言うことは他の人から見ればそのように映るので、その立場になると、力より穏やかにすごしたいと言う気持ちが強くなるのかもしれない。

ただ、この世界は、力、エネルギーによって作られていくので、この世界で何かをしたいと考えたらまず力が必要になります。

異世界に召還されたら魔法の力が必要になると同じようなものですね。

若くして力なんていらなと思う人がいたら、かなりエネルギーがなくなっているでしょう。

ボランティアにしても人を助けたいと思う気持ちも、やはり力が必要なので、金儲けをして権力を手に入れたということだけが力を必要と言うことではありません。

力がいらなと思う人はこの世界で何もやりたくないと言う人です。

うつ病の患者などはそうかもしれません。

自殺を図る人もそうかもしれません。

ただ普通の人には力を欲しているので企業や宗教はそれを利用します。

なぜ、ここまでくどくど力を強調するかと言うと、宗教とは、宗教の教義よりも宗教の力に信者は依存したいと思う、と言う説明のためです。

つまり教義は何でも良いのです。拝む神様も何でも良いのです。

力さえ感じられれば信者は満足するのです。

キリスト教や仏教、イスラム教、世界三大宗教に期待するのも力で

す。

それで言えば、日本において法華経は力を持っています。

力が感じられれば教義は分からなくても信者は集まるし、納得もするのです。

同じ末法思想の念仏にしても同じです。

元々念仏とは南無阿弥陀仏と唱える行ではありません。

仏の世界をイメージしてその世界に入り仏と一体化となる修行が念仏です。

それゆえ、かなりレベルが高い修行なのです。

それを法然が「南無阿弥陀仏と唱えれば浄土にいける」と念仏の修行を簡素化し庶民でも入れる行にしてしまい、親鸞が「南無阿弥陀仏と唱えなくても救われている」と信じるといふ行為まで否定しました。

つまり教義的に言えば、念仏も唱える必要もないので、宗教自体必要がなくなりえます。だから本来なら浄土真宗自体消滅しても良いのですが蓮如が出て布教をし、力を示したから信者が爆発的に増え、浄土真宗は戦国時代の一大脅威にもなったのです。

教義ではなく、力に移行したために信者が増えたと言うことです。

つまり今の浄土真宗の信者は親鸞の信者ではなく蓮如の信者と言うことです。

蓮如に関してはちゃんと勉強をしていないので断定するのもどうかと思いますが、ただ、武力をもち政治に関わっていく姿を見ると親鸞の教えではないだろうと思います。勉強すればまた考え方も変わるかもしれませんが。

何しろ、私が言いたいのは宗教は教義よりも力を信者は期待すると言うことです。それゆえ力がついたところが後世に残っていくと言うことでもあります。

ではなぜ力が宗教につくのか？

これは開祖、または布教をした人の念の強さではないかと思うのです。

念

ここで書くことはほとんどが調べれば学者などが述べていることばかりです。

ただ一般の人が知らないだけで、内容に驚いたとしても、一般的な説と言えます。

もちろん私独自の説もあります。

ただ、前回書いた念のことは完全な私の説ですね。

その辺はちゃんと読んでもらっていればわざわざ説明もすることもないかもしれませんが、一応念のため。

さて念ですが、抽象的で良く分からないと思います。

私も良く分からないのですが「強く願えば叶う」とか「成功をイメージしろ」などは念だと思つのです。

成功した人がこのような言葉はよく使つと思います。

あのソフトバンクの孫氏などは若いときに定年くらいまでのことをイメージしていたみたいですし。

そのイメージ力が強くて、才能があり、内面の力がある人が世界的な成功者になるのかもしれませんが。

ただ、才能がそれほどなくても強く願うことによってある程度社会

に成功している人はたくさんいると思います。

宗教に限って言えば、才能ではなく思い込みが強い方が何かしらの形を作っているようです。

日蓮にしても、思い込みが強く内面的な力も強かったから、その念が後の時代まで引き継がれていったんだろうし、そのもととなる天台大師の摩訶止観の中の一念三千も、世界をこのようなものだと決めつけているところが完全に思い込みだろう。

ただその思い込みも、宗教だと証明もされないから、信者は信じて凄い理論だと思わされてしまう。そして、それが時代が経つにすれ、どんどん力が入っていく。

その力に引かれ日蓮も天台の法華経を選んだのかもかもしれない。

巨大宗教団体は、そのような念の集合体かもしれない。

もちろん教義はどうでもよく、せいぜい今の時代の道德程度が表されていればよい。

そのように念の力で宗教が成り立っているのなら、宗教に正邪は存在せず、ただ、力があるかないかだけで、力がない方が邪となり、ある方が正となる。

法華経は妙法蓮華教徒と鳩摩羅什は約したが、本来は「白蓮のごとき正しい教え」と言う題名で鳩摩羅什以外では「正法華経」と約されていた。

まさしく力の勝者の名前である。

尊称を使った一代記は信用おけない(前書き)

10年位前に書いた仏教の論文を他のブログに載せています。

かなり言葉が難しいのが出てきて、一般の人にはとっつきにくいかなと思っていたのですが、もう一年たっているのに、更新をしないでなくてもそこそこのアクセスがあるので、難しい言葉が出て興味を持つ人が多少はいるようです。

そのこのブログを無くす、もしくはサイト自体がなくなるなんていうことも考えられるので、ここに5〜60回かけて転載していこうかなと考えています。

難しい言葉が出て理解しづらければスルーしてください。

尊称を使った一代記は信用おけない

今、世の中に存在している釈迦の情報、もしくはイメージは、仏教の中に存在している釈迦や教団の中に存在している釈迦であって、人間としての、個人としての釈迦ではない。

その証拠に、釈迦の一生の本の題名にしても、釈尊、釈迦牟尼仏、仏陀、という尊称を多くの著者が使うだろう。

釈迦は、偉大な仏様だったのだから、そのような尊称を使うのは、あたりまえだという人も多いと思います。

そこでそんな人達のために、ここに、題名としてひとつの例をあげます。

「日蓮の生涯」「日蓮聖人の生涯」「日蓮大聖人の生涯」「日蓮大聖人様の生涯」。

この四つの題名をみたとき、あなたはどの本を手にとりますか？

あなたが一般の人なら「日蓮の生涯」を手にするだろうし、日蓮系の信者なら「日蓮聖人の生涯」を、創○学会員なら「日蓮大聖人の生涯」を手にすると思います。

さすがに「日蓮大聖人様の生涯」は、一般書店で販売はされず、教団内での販売となるだろうから、あなたが一般人の場合、それを手にすることはないでしょう。（現在なら書店でも出版されているかもしれませんが）

このように、尊称の使い方、著者がその人物をどのように考えているのか、あるていど想像できるだろう。

公平にその人物のことが知りたい場合、尊称のついた題名はこのまじくはないというのは、誰でもわかると思う。では、釈迦に関してはどうなのだろうか？

実は、釈迦に関してはけっこう複雑で、単純に他の人と比較はできない。

それは仏教の開祖だからとか、宗教上の理由からというだけではない。

釈迦が個人名ならなんの問題もなく『釈迦の生涯』でいいのだが、釈迦とは個人をさしている姓名ではなく、種族をさしているため、厳密に言えば、個人としての釈迦は存在しないのである。

よくつかわれる釈迦牟尼とは、釈迦族の聖者という意味である。そのため学者のほとんどは、釈迦個人の名称として『釈迦』という名称は使わない。

しかし私は、釈迦個人をさす名称として『釈迦』という名称を使ってもかまわないと思う。なぜなら日本人の大多数の人は、釈迦といえば仏教の開祖の名前だと思っっているし、日本にも、地方の国の名前を自分の姓として使う例が多くあり、そのようなことに違和感がないからである。

シッターは釈迦の本当の名前ではない（前書き）

もうご存知かもしれませんが感想欄を閉鎖しました。

そろそろ、色々な宗教の信者が異議を載せてくるのではないかと危惧したためです。

信者と論争は不毛なだけなのでしません。

信者は教えが素晴らしいと確信しているでしょう。

それはそれでよいのです。

そう思えば幸せなのですから。

しかし、それを私に理解してくれと押し付けられても困りますので私は無神論者ではありませんが、既存の宗教団体の教えには全てと
言ってよいほど賛同もしませんので。

シツダツタは釈迦の本当の名前ではない

地方の国の名を姓とする例をあげれば、足利尊氏や新田義定がそうである。

もともとは、源 という姓なのだが、足利の土地、新田の土地に住んでいたから、それぞれ足利の尊氏、新田の義定といわれ、それが姓のかわりとなっている。(その姓のかわりを日本では苗字と呼んでいる)

今の政治家でいえば新潟のまき子、神奈川の純一郎みたいなことである。だから、釈迦族のゴータマ・シツダツタのことを、略して釈迦でもよいと思うのだが。 学者はそれを許さない。

釈迦でよいのではないのかという理由はまだある。釈迦の正式名はゴータマ・シツダツタといわれている。

ゴータマは問題ないのだが、シツダツタはちょっと問題がある。

シツダツタは本当の名前では、まずないのである。この名前は、釈迦滅後何百年も後につくられた名前なのだ。

本当の名前では、まずないという表現をするのには訳がある。シツダツタという名は原始聖典にはでてこず、仏伝の中にでてくる名前であり、この名前は「目的を完成している者」という意味である。

目的を完成している者ということとは誕生した時、もうすでに仏陀となつていているということでもある。

これはどういふことかというところ、釈迦滅後、何百年も経った頃、仏教徒達は偉大な仏陀が、この世で悟りを開き仏陀になったのではなく、過去において、すでに仏陀となっていたと考えたのだ。

なぜなら、仏陀となるにはたいへんな修行が必要で、とても一度きりの人生だけで悟ることは不可能だと考え、釈迦牟尼は、遠い前世から仏陀だったから、この世に生まれても、仏陀の姿を現すことができたと考えたのだ。

それゆえ、シツダッタという名前だったと想像したのであろう。

もともと、シツダッタという名前は釈迦だけにつけられた名前ではなく、ジャイナ教祖のマハーヴィラの父も、シツダッタという名前だったという。

実はジャイナ教にも、^{フツダ}仏陀という存在はでてくるのである。^{フツダ}仏陀は、
けっして、仏教だけのオリジナルではないのだ。

つまり、釈迦滅後、何百年も経った頃、シツダッタという名は仏陀に相応しい名だと、誰もが納得した名前だったのである。

それゆえシツダッタという名前は、釈迦滅後、何百年経った頃、仏教徒達によって、つくられた名前だと思っただが、状況証拠だけなので、本当の名前では、まずないといわざるをえないのです。

釈迦は仏を目指していなかった

仏陀とシッダッタという名はとても縁が深いが、釈迦は仏陀をめざし修行したのではなく、真のバラモンをめざし修行していたのだから、実際は、釈迦と仏陀は縁が薄かったのである。

釈迦が仏陀をめざさなかったという点、ほとんどの人は驚くと思いますが、釈迦が生存していた時代、仏陀という存在は、それ程大きな存在ではなかった。

おそらく仏陀と言う名称がでてきたのは釈迦滅後か釈迦存命時だとしてもほとんど老年時だと思われる。

そして、仏陀の存在が大きくなったのは、釈迦滅後の時代からなのです。つまり、釈迦はこの世を去ってから、後の信者達に仏陀にされたのであった。

このようにかくと、あまりにも唐突だと思われる人がほとんどでしょうが、ここではそのような唐突のことをくさるほど書いていきません。しかし、別にそれは突拍子のないことではなく、今の学者の研究を分析すると、そう考えるのが自然ではないかということなのです。

話はとんでしまいましたが、シッダッタという名前はゴータマと違い、後世につくられた名前だと思われるため『ゴータマ・シッダッタの生涯』だと、人間釈迦の生涯とはいいがたいのである。

それでは『ゴータマの生涯』ではどうだろうと考えても、ゴータマだけでは、釈迦と同じく個人をさすのではないし、一般の人に『ゴ

『タマの生涯』の題名では、いったい何の本なのかわからないであろう。

だから『ゴータマの生涯』なら『釈迦の生涯』の方が一般の人にはわかりやすいはずだ。だから、釈迦という名称をつかって、それ程間違いいではないと私は考えるのです。

尊称をつかえば、読者に対し公平に映らないと思われるのに、なぜ、学者の先生たちは釈迦に対し、釈尊とか仏陀という尊称をつかうのだろうか？

その理由のひとつとして、宗教の研究をしていると、いつのまにか心の中に信仰心が生まれ、又は、最初から信仰心があるため、学者になり仏教を研究するので、釈迦に対し尊称をつかうことがあると思われる。

又、当然、読者層のほとんどが仏教信者だろうから、それを配慮して尊称をつかうということもあるだろう。

しかし、一番重要なことは、仏典並びに仏伝においての釈迦は、その存在がほとんど仏陀として登場するため、その呼称をつかったと思われる。

日本を恐怖に陥れたオム真〇教の教主も、信者が尊師と呼んでいたため、マスコミは報道の初めの頃、テレビで尊師という尊称をつかっていただろう。

しかし、そうはいつでも尊称は尊称である。だから、尊師が尊称だと気づいたマスコミから、だんだんと尊師とはいわなくなった。

もちろん釈迦に対して、ほとんどの人は尊称をつけたいだろうが、釈迦を人間としてみたとき、よけいな尊称は逆に、釈迦の生き方を否定するのではないかと思ってしまう。だから釈迦に対しても、適切な呼称があってもよいのではないかと思うのだが

信仰は切り離し、学術的な釈迦の呼称で適切なものはないかと考えると、一番はゴータマ・ブッダであろう。

仏教は仏の教えなのだから、仏、すなわちブッダという呼称を付けざる得ない。しかし、ブッダとは釈迦だけに特定されないため、ゴータマ・ブッダなら、はっきり釈迦個人を指すことができるため適切である。

又、仏もしくは仏陀と漢字でかくとあきらかにそれは、この世界で最高な存在に与えられる尊称であるが、カタカナのブッダだと「めざめた人」という意味もあるので、現代でいえば教授ぐらいの呼称と考えることができる。

もちろん仏典、仏伝の中にでてくるブッダのほとんどは尊称なのだが、ブッダという呼称が初めて世にでてきたときは、後の時代のよくな最高尊称ではなかったので、ゴータマ・ブッダという呼称が学者にとっては一番適切なような気がする。

しかし、私は仏典、仏伝にでてくる釈迦を描く、というより、人間としての釈迦を描きたいためゴータマ、ブッダより、釈迦か、ただ単にゴータマという呼称をつかいたい。

釈迦はゴータマさんと呼ばれていた

ちょっと考えればあたり前のことなのだが、釈世は在世当時、周りから、ブツダと呼ばれていたのではなく、『ゴータマさん』と呼ばれていたのである。

「ゴータマさんはこのように言った」なんて、今の仏教信者にとっては違和感があるというより、嫌悪感があるかもしれない。

私自身、初めてそれを知ったときは嫌悪感があった。

日本の仏教は、大乘仏教が、聖徳太子の時代から広まっており、その大乘仏教では、釈迦のことは、仏、如来、釈迦牟尼、世尊という尊称しかつかわれておらず、ゴータマさんなんていう呼称は考えられなかった。

例えば、妙法蓮華経序品第一では、如是我聞一時仏住というように、ある時仏は、で始まるし、方便品第二では、爾時世尊というように、その時世尊はで始まる。

これが、その時ゴータマさんは靈鷲山にて説法した。では仏教にならない。

仏教は仏の教えでなくてはならないのであって、ゴータマさんの教えでは、あきらかにおかしいだろう。だから、釈迦滅後、釈迦の教団が仏教へと変わっていくにしたがい、教え（法）の中でゴータマと呼ぶのを改めさせていく。

そのシーンをここに紹介する。

釈迦が菩提樹の下で悟りを開き、その悟りを五人の仲間來說こうという場面がそれである。

「修行者よ如来に呼びかけるのに『名』をいい、また『きみよ』という呼びかけをもって如来に話しかけてはならぬ」

と、釈迦が五人の仲間に向うのである。この言葉にでてくる『名』はゴータマのことだ。

又、ゴータマさん以外にも『君よ』と呼びかけられていたので、それも如来にいつてはいけぬと禁じた。

仏教信者にとっては当然だと思ふ言葉だが、一般の人からしてみれば、なんて釈迦は傲慢なのだろうと、釈迦の人格を疑うだろう。

もともと、仏教信者は、釈迦は人ではなく、仏、如来なのだから『人格』以上の存在だから、当然だろうというと思う。

現代だって、会社の代表者は社長と呼ぶし、大学のおえらいさんは、教授と呼ばなければ失礼だろうというにちがいない。

しかし、それはあくまでも役職であり尊称ではない。

先生と言う尊称で呼ばれる職業も幾つかあるが、先生と呼ばれる職業の人にろくな人はいない。先生と呼ばせて満足しているレベルの人たちである。

それと同じように尊称を呼ばせて満足するのは仏教信者のいいぶんであって、人間釈迦という観点からみると、そのことにより、釈迦

の魅力が失せていくのは事実であろう。

しかし、心配しなくてももらいたい。この言葉はあきらかに釈迦滅後、誰かがつくったものだと思われるからだ。如来という尊称が、釈迦滅後の時代につかわれているから、あきらかに、この言葉に釈迦は関与していない。

私は、釈迦に魅力を感じている仏教信者でもあった。

仏教信者の目で数多くの仏教書を読んでいると、内容はわかっても意味がわからない。これが仏教信者を離れ、釈迦を個人としてみると、様々の仏教書が簡単なことなのだと、わかるようになるから不思議だ。

今の例もそうである。

釈迦の言葉ではなく、後の仏教教団が、釈迦を祀りあげたいためにつくった言葉だと考えると、なるほどなど、わかってしまうでしょう。

ものすごく膨大な仏教書の中で、釈迦の真実の言葉は、ほんのひとにぎりしかないということをしれば、仏教の本質がわかってくるものなのです。

別に仏教の批判を、私はするつもりはないし、仏教は仏教で認めているのだが、仏教イコール釈迦個人の教えというのは、あきらかに違うのです。

皆がつくった『スーパースターの釈迦』の教えというのなら正解といえるが、紀元前四百 五百年頃インドの地に存在した釈迦の教え

が、イコール仏教ではないのです。

だからゴータマさんという呼称も、私にとっては釈迦に親しみをもててよいのですが、釈迦という呼称も捨て難いものがあります。

宗教人の生き様を知りたい、学びたいという場合、尊称のついた主人公からは多くを学べない。なぜなら、その枠の外に主人公をだしてあげないから、自分達は敬っているつもりでも、逆に、主人公を貶めているという事が結構あるからだ。

釈迦が傲慢に振る舞った場面でも、尊称をつけて本を書く人は、如來に対しては口の利き方にも気をつけなければいけないと教える。

まるで規律の厳しいどこかの学校や、独裁者の治めている国の教えのように、私には聞こえる。

そついう世界では、大事なことがねじれていくし、物事の本質を見失い、表面的なことばかり大事にするように思える。

聖はアーリヤ人という意味

例題としてだした日蓮大聖人にしても、そのように呼ぶ人達は、当然、尊称をつかい日蓮を呼んでいるのだが、もともと聖という意味はアーリヤ人という意味で、その字を分解すると耳と口の王だから、これはあきらかにバラモンをさしているのである（ブラーフマン《梵天》の声を聞きその声を口から喋る王という意味）。

バラモンとはインドの身分制度の最上級に位置する階級である。

日蓮は自ら「自分は 旃陀羅の子」だと言っている。

旃陀羅とは身分制度の中にも入れない、人間ではなく動物と同じだとあつかわれている、一番下の階級につかわれている差別用語である。

日本では土農工商という身分制度が江戸時代にあつたが、その下に穢多、非人という身分制度に入れない人達がいた。旃陀羅もそれと同じなのである。

だから日蓮大聖人という尊称は、日蓮自身を、とてもバカにした呼称なのである。

釈迦のことに関し、人々は殆んど何も知らない。それは一般人だけでなく宗教団体のトップも知らないのだ。勿論全ての宗教団体ではないが

知らないがゆえに

「釈迦が八正道を説いたのは、私の霊体が釈迦に教えたからだ」

なんて平気で言う教祖もでてる。

釈迦というブランドを使えば、自分の言葉に重きをおけると思っているのだ。（釈迦は八正道を説いていない）

孔子もソクラテスも釈迦と同じ時代に活躍した

釈迦が活躍した時代は、今から二千五百年ぐらい前の時代です。

二千五百年前というと、中国は孔子が儒教を説き、ヨーロッパのギリシャでは、ソクラテスが哲学を、そしてバビロン捕囚により、ユダヤ人がバビロンに連れていかれ、その地で、旧約聖書が文字によりつくられていき、現代のユダヤ教が生まれたのも、ちょうど同じ時代だったのです。

つまり二千五百年前頃の時代は、現代に強く影響を与えている、哲学、宗教が世界同時多発したのである。

この事は偶然なのだろうか

すくなくとも、古代インドとギリシャに関しては、偶然ではなく必然のように思われる。なぜなら、ギリシャ人も古代インド人も、元をただせば同じア リヤ人だからです。

ア リヤ人とは、肌が白く鼻が高い民族で、簡単にいうと白人のことである。

紀元前千七百年頃、南ロシアに住んでいたアリア人は、何かしらの理由で移動を始め、一部はヨーロッパに行き定住し、ギリシャ人、イタリア人、ゲルマン人、チュートン人、ケルト人、スラヴ人となった。

又、あるアリア人の諸部族は東方に向かい、カスピ海の南東にあたる西トルキスタンに数百年定住し、そこから再び移動して、イン

ド・イランに定住したのである。

つまり、元をただせばギリシャ人もインド人も同じ民族だったのである。

同じ民族ということは、宗教も初めは同じだったということ、実際、両者の宗教はとても似通っており、ギリシャも古代インドも自然崇拝の多神教で、神とは輝く者という意味で、天を最高の神としていた。

インドでは天の神をデイヤウスと呼び、ギリシャではゼウスと呼ばれていた。ほとんど同じ呼名といってよいだろう。

又、アーリヤ人はもともと遊牧民だったので、火をととても大切にし、そのため火を祭り、祭る火のことを聖火としていた。今でもオリピックで聖火を大事にするが、これは、もともとアーリヤ人の宗教から起こったものだと考えられる。

ギリシャの聖火は、現代オリピックの中に形を残しているが、インドの聖火も密教の中に取り入れられ、護摩として現代でも残っている。

宇宙に関しても、ギリシャと古代インドは同じように捉えていた。それは、宇宙は神々とは別にそれ自身で存在し、神々も人も宇宙の中に存在して、宇宙には一定の法則があるということである。

この考え方は、宗教というより哲学や科学に近いものがあると考えられる。

そのため、ギリシャのソクラテスと、古代インドの釈迦の教えは、

宗教というより哲学といった方が正しいのかもしれないのだ。

ソクラテスが哲学なのは当然だが、釈迦は宗教だろうと考える人がほとんどでしょう。しかし、釈迦の時代、その教えは宗教であったが、今の信仰宗教とは違い、哲学宗教だったので。

古代インドは、現代の、人々を救うという宗教ではなく、自己の完成とか、どういう生き方をすべきかという教えだったので、哲学に近いものがあつたのです。

ギリシャと古代インド・イランはアーリヤ人により繋がっていたということがわかり、両者が、宗教、思想で出発点が同じだったため、二千五百年前頃、両者に哲学、宗教が華開いたということは、まったくの偶然だということができないということを書いてきたが、他の国との関係はどうだったのだろうか

エデンの園はシュメール

実は、世界最古の文明メソポタミアにも、アーリヤ人は紀元前二千年紀の中ごろには住んでいたらしいのだ。

インド、中東は、古代からお互い交流があり、ひとつの民族だけがそれぞれの国に住んでいたというわけではなく、沢山の民族がいりみだって、ひとつの国に住んでいたので、当然、アーリヤ人の宗教、思想は、メソポタミアにもなにかしらの影響を与えたと思われる。

バビロンはメソポタミアの地に生まれた国であるから、旧約聖書にも、アーリヤ人の宗教、思想は影響を与えたかもしれない。

ユダヤ教の聖典、旧約聖書は、ユダヤ人オリジナルの聖典だと、日本人の大半の人はおもっていますが、かなりメソポタミアの影響を受けているのです。

エデンの地は、メソポタミアのシュメールの地ではないかとか、ノアの洪水は、メソポタミアの川の大洪水ではないかともいわれています。

メソポタミアとは今のイラク辺りで、チグリス川とユーフラテス川に挟まれた広大な土地に生まれた。

この広大な土地は、二つの大きな川が肥沃な泥を運び、すばらしいシュメールの農業技術によって、驚くべき農作物の収穫を作り出した。

なにしろ、一粒の麦による収穫が、七十六、一倍になったというの

だから。

中世のヨーロッパでは五倍程度といわれているのだから、その凄さがわかるだろう。

しかし、農業に優れていても天然資源がほとんど何もなかったので、交易が活発となった。レバノンやインダス文明のインドとも交易をしていたのである。

このように、何の繋がりもないように思われた釈迦（古代インド）、ソクラテス（ギリシャ）、メソポタミア・バビロン旧約聖書はどこかで、なにかしらの系に繋がっていた可能性もあります。

宗教はある日、突然、神が降りてきて人々に教えたものが、現代にも続いているというわけではなく、出発点から現代まで、なにかしらの系で繋がって存在しているのです。

世界の三大宗教といわれる、キリスト教、イスラム教、仏教にしても、お互いがまったく関係のない宗教かといえば、そんなことはなく、キリスト教がユダヤ教を下地に生まれたように、イスラム教もユダヤ教とキリスト教を下地に生まれた教えなのです。

仏教は、古代インド、アーリア人の宗教、バラモン教を下地に生まれ、中国の道教と融合し、日本に流れ、日本でも日本神道と融合して今日に至っている。

宗教とは常に変化していくものであるし、いきなりその宗教が顕われたのではなく、その宗教が顕われる下地がなにかしらあるものなのです。

このことは世界的な宗教となっているキリスト教、イスラム教、仏教、ユダヤ教、ヒンズー教等には当てはまるし、発展していく宗教とはそのようなものだと思うのです。

仏教にしてもいきなり出現したのではなく、仏教が生まれる下地が、古代インドにはあったということです。

それでは、仏教が生まれる下地となった古代インドの宗教とは何かとなると、それはバラモン教なのです。

バラモンという『名』は、インドや仏教に詳しい人にとっては、とても馴染みのある名ですが、一般の人は、あまり聞いたことのない名だと思えます。

バラモンは元々ブラーフマナといいその音訳を漢字で書くとき婆羅門と書き、それがバラモンとなった。

このバラモンはインドを知るには絶対必要な名でもあります。

もともと、古代インドはアーリヤ人の国ではなく、バラモンの国と呼ばれていた。

アーリヤ人は、西トルキスタンから一部はイランに入り、他の一部は、紀元前千三百年頃インダス河上流のパンジャーブ地方を占拠した。

そして、紀元前千年頃までに最初のヴェーダ『リグ・ヴェーダ』を成立させたらしい。

そのヴェーダを唱えていたのがバラモンで、その宗教をバラモン教

といい、現代では、そのバラモン教がヒンズー教となっている。

バラモンという名を知っている人は少なくないだろうが、ヴェーダとなると、知る人はかなり少なくなるだろう。

しかし、古代インドや釈迦のことを知るのに、ヴェーダは絶対に知っておかなければいけない”名”なのです。

なぜなら、ヴェーダの存在がバラモンの必要性をつくっているし、ヴェーダが古代インドの宗教、哲学の全てだったからです。

もともとアーリヤ人は政治的に結びついている民族ではなく、宗教によってまとまっていた民族なので、彼らにとって宗教とは、全てにおいて一番にくるものだったのです。

それゆえ、パンジャーブ地方を占拠したアーリヤ人が作りだしたヴェーダは、彼らの中心的存在だったのです。

ゾロアスターも釈迦とほとんど同じ時代の人物

西トルキスタンからイラン（ペルシャ）に向かったアーリヤ人も『アヴェスター』という聖典をつくった。

この『アヴェスター』の中で一番古い『ガーサー』の言語はヴェーダの中で一番古い『リグ・ヴェーダ』の言語と、とてもよく以ているので、西トルキスタンからアーリヤ人がインドとイランにわかれた時代も、『リグ・ヴェーダ』がつくられた時代から、そう離れていないだろうといわれている。

『アヴェスター』はゾロアスター教の聖典である。

ゾロアスターは釈迦よりひと昔前、紀元前七世紀中頃から紀元前六世紀後半にかけて活躍した、ゾロアスター教の開祖である。

年代的にみると、釈迦とゾロアスターが活動した時代に百年位のずれがあるが、二人が活躍した時代は、けっして決定された年代ではなく、学者によって様々な年代がでてくるので、大きくみると、ほぼ、同じ時代といってもおかしくはないだろう。

だから、ゾロアスターも、世界同時多発した宗教、哲学の一人であったといえる。

しかし、現代においてゾロアスター教の信者は、十二万人位といわれているので、現代にも強い影響を与えている宗教とはいえないであろう。

ただゾロアスター教というと、私達の年代にとっては、中学時代の

世界史で習った宗教なので馴染みは深い

私達が、中学の時習ったゾロアスター教は、善悪二神（柱）の神様が
いる宗教で、善と悪の神様が顕れる宗教では、世界最古の宗教だ
と習ったおぼえがある。

ゾロアスター教のおもしろいところは、アーリヤ人がつくった宗教
だから、当然、聖火を大事にしているところもあるが、その
聖火によって、最後の審判が行われるところだろう。

最後の審判という教えがメソポタミアに流れたか、それとも、メソ
ポタミアからイランに流れたのか分からないが、交流した可能性は
あるだろう。

もしかしたら、ユダヤ教、キリスト教のふる里は、イランのゾロア
スター教という可能性だってあるのだ。

阿修羅（あしゅら）は太陽神で大日如来

ゾロアスター教の善神はアフラ・マズダーという。

このアフラ・マズダーという神様は、今度は、仏教にとつてもなじみが深い神様なのである。

アフラ・マズダーは、インドではアスラとなり、仏教では阿修羅となったのである。

修羅なら一般の人でもよく知っているだろう。

『修羅のごとく戦う』なんて、よくつかう言葉であるし、『アシユラ』とか『修羅の刻』等、コミックにも、その言葉はよくでてくるので、子供でもその名を知る人は多いと思う。

仏教で、阿修羅は帝釈天たいしゃくてんと永遠に戦いつづけていたが、釈迦に会い、仏教に帰依し、仏教の守護神となったと教えている。

しかし、阿修羅を別な捉え方をしている話もあるのだ。

その別な捉え方とは、アスラはヴィローチャナの息子ヴィローチャナであり、バリでもあるということである。

ヴィローチャナは太陽神のことで、それゆえ、バリは太陽神の息子ということになる。

ヴァイローチャナは中国にいき、漢字に変わると毘盧遮那仏びろしゃなぶつで、太陽神が大日如来ということになる。

神の存在は、時代や国によって次々変化していくため、アフラ・マズダーは大日如来にまで変化したのである。

「阿修羅が大日如来、そんなばかな、阿修羅といえば悪神の代表で、キリスト教でいえばサタンみたいな存在だ。

そんなけがわらしい存在が、この宇宙の中心、大日如来だなんて、ばかも休み休みいえ」

なんて言う人がでてくるかもしれませんが、この事に関しては、色々な仏教関係の本にでてるので、なにも目新しい話ではないのです。

もともとインドでも、アスラはイラン（ペルシャ）と同じように最高神だったのですが、だんだんと、その凄さに、神にあらずという存在となり、悪神になっていってしまったのです。

インドにはアスラに関して次のような話もあります。

神々とアスラは世界の覇権をかけて戦っていた。神の王はインドラ神。アスラの王はヴィローチャナ。

ヴィローチャナは全てを照らしたすものという意味で、太陽を意味していた。

太陽を意味しているというこの名前が、大日如来へと変わっていったのである。インドラ神とは帝釈天のことで、天界最強の神様であった。

インドラ神率いる天界軍と、ヴィローチャナ率いるアスラ軍の戦闘は、なかなか決着がつかないでいた。そんな時、ヴィローチャナの戦車が故障してしまい、その隙を縫って、インドラ神がヴィローチャナを殺してしまいます。

しかし、ヴィローチャナの魂は妻に入り、彼の子供として、ヴァイローチャナとして生まれてきたのです。彼は別名バリといいました。

バリはインドラ軍を次々やつつけてしまい、追っ払ってしまった。

そして、バリは地上に一大帝国を築き、愛と正義に満ちた、平知で豊かな太陽の帝国をつくった。人々は幸せをかみ締めて暮らしていた。

その頃、インドラ神はヴィシュヌ神に助けを求めた。ヴィシュヌ神は常にインドラ神の味方をしていたので、インドラ神の助けを受けることにした。

ヴィシュヌ神は小人のバラモンに化け、バリの前に立ち

「アスラの王よ、私に三步で歩ける土地を下さい」と、頼んだ。

「そんなこと問題ない。あげるよ」

と、バリは、たかが小人が歩く三步なので、簡単に許した

すると、小人は巨大なヴィシュヌの姿に変わり、一步で地上を、二歩で天界を、三步でバリの頭を踏みつけ地下世界に押し込めてしまった。

人々は、バリの統治が無くなってしまったので嘆き哀しみ、バリの復活を願った。

その願いは、南海の楽園バリ島によみがえるのであった。

日本でも人気のリゾート地、バリ島の由来はそこからくるのであった。

なんともいえない話である。

太陽の化身がアスラで、アスラの治めていた国は平和で豊かな国であったのに、インドラの願いを受けたヴィシュヌ神が、アスラをやっつけてしまったという話なのです。

この話は、いろいろな意味が含まれているように思われますが、アスラが、古代インドでは太陽神であったのだということがわかりません。

そして、太陽信仰はインドラによって亡ぼされた。

インドラはアーリヤ人の事を指していますから、アーリヤ人が、古代インドで、太陽を信仰している民族を、亡ぼしたということにもなります。

実は、アーリヤ人はインドのインダス河流域に進入していくに従い、インダスの原住民と、激しい戦いをしていたのです。

それでは、原住民がアスラ軍だったのかというと、必ずしも、そうだとはいいきれないでしょう。

なぜなら、アスラは、ペルシャではアフラなのですから、アーリヤ人がインダスに進入する前からの神といえるからです。

ただ、インダスの原住民も、太陽信仰だったと思われるところがあるので、このアスラとインドラの戦いは、インダスでの原住民と、アーリヤ人の戦いに置き換えているといえるかもしれません。

実際インダスは、アーリヤ人が進入してくるまで平和で豊かな国だったのです。

世界四大文明のひとつ、古代インドに興った文明。

この文明が釈迦や仏教にどう影響を与えたのか、それは次の章から説明します。

釈迦のことを描くのに、アーリヤ人、ヴェーダ、バラモンは絶対に必要であるが、インダス文明もかなり重要なのです。

インダス文明は平和で文化的な文明だった

インダス文明は、世界四大文明のひとつで、主に、今のパキスタン、インダス河周辺に築かれた一大文明です。

世界四大文明といっても、現代では、日本や韓国等アジアからみた歴史感になってしまっている。

もともと、四大文明という名称はヨーロッパでつくられたが、現在、メソポタミア、エジプト、インダス、中国を当てはめるのを、ヨーロッパではあまり用いていない。

ヨーロッパにとって、インダス、中国の文明はピンとこないのである。

欧米にとってアジアの歴史は人類の歴史に入れないのだろう。

アメリカのメジャーリーグで米国一を決めるのを、ワールドシリーズというように、メジャーリーグから見ればアジアの野球はAAA以下のレベルとみなされ無視される様に、アジアの歴史も二流扱いを無意識的にされるのだと思う。

ヨーロッパ人はその二つの代わりに、ギリシャ文明やローマ文明を入れている。

又、四大文明以外にも様々な文明の存在が現在では確認され始めている。

日本の縄文式土器文明等は、四大文明より古いとされているし、

アンデス文明の成立は、四大文明と同じくらい古い。

そう考えれば、世界の四大文明という名称自体がおかしいのだが、私達の年代は、中学の歴史で習ったその言葉を捨てるのもなかなか難しい。(大昔、縄文人が世界を支配していたという説もあるが、小説の題材としては面白い)

四大文明に入ろうと入るまいが、インダス文明が素晴らしい文明だったことは確かである。

インダス文明は、紀元前三千年 前千五百年頃存在していたといわれている。

文明の長さが千五百年といえれば日本史と同じくらいの長さを持っているといえるだろう。

勿論、日本人の歴史を考えると、縄文時代から考えねばならないから二万年位の歴史があるが、日本の歴史を大和朝廷から始まったと考えると、丁度その位であろう。

千五百年という時間の長さは権力者が何十人と交代し、文化も十以上は起こる長さである。

どうも私達日本人は文化的な歴史が紀元元年から始まっているような錯覚を起こすがそんなことはなく、紀元前にも文化的な歴史は数多く存在していたが、埋没してしまっているため知らないだけなのである。

インダス文明は、北西インドのパンジャーブ地方からボンベイの北方にかけて起こった。

大きな遺跡としてインダス河上流のハラッパー遺跡、下流のモエンジョ・ダロー遺跡があるが、両者の間は六百五十キロメートルも離れている。

それなのに、まったく同じ文化の遺跡が発掘されている。

これは同時代に両者は繋がっていたという証明である。

その広さは四大文明で、一番の広さなのだ。

東西千六百キロ、南北千四百キロ、その中に大小千五百を越える遺跡がインダス文明には存在している。

インダス文明は、アーリヤ人がインドに侵入する以前からそこに定住していた原住民、（主にドラヴィダ人）が造った文明で、平和で快適な国であったようだ。なぜなら、こぶ牛の玩具や車のおもちゃ等、色々な子供の玩具が出土しているし、都市には下水道も配備されていたらしい。

そして、出土品の中には武器の類はほとんど存在していないし、戦士や武士の土像や彫像も見あたらないからである。

さらに、帝王崇拜の痕跡もないので、王の政治というより宗教にたよった国であつたらしい。

そんな国に、戦闘的なアーリヤ人が進入してきたのだから、インダスの各都市がどうなつたかは容易に想像できる。

インダス文明は滅んでしまっただが、その原因として、アーリヤ人の進入によって亡ぼされた、もしくは大洪水によって滅んだといわれている。

夜叉(やしや)も金毘羅(こんびら)様も毘沙門天(びしゃもんてん)も皆イン

ンダス文明は滅んでしまっただが、インダスの宗教は、後の仏教や、ヒンドゥー教に多大な影響を与えた。

その第一は水浴であろう。

現代でも、ガンジス河に入り、聖なる川の水を身体にかける信仰者の姿を、テレビ等で目にする人も多いと思いますが、その宗教的儀式はインダスから初まったのです。

水が浄めをはたすというのは、インダス文明の中心的なものだったらしい。

キリスト教等にも聖水がでてくるが、インダスとシュメール(メソポタミア)は交易をしていたので、聖水の原点はこのへんにあるのかもしれない。

又、仏教の灌頂もそうであろう。

古代インドでは国王の即位や立太子の際、頭頂に水を注ぐ儀式があり、それを仏教(密教)がとり入れ、伝法、授戒、結縁などのとき、香水を受者の頭に注ぐ儀式が行われるようになった。

さらに、墓参りの時、墓石に水をかけるのも、ここからきている。

水浴以外でも偏袒右肩^{へんだんうげん}、樹木崇拜、性器崇拜、動物崇拜、卍の標識等も後の宗教に多大な影響を与えた。

偏袒右肩とは袈裟けそ（僧が着ている衣）をかけるのに右肩をぬぎ、左肩のみを覆うことである。

お坊さんを見かけると袈裟が片方しか覆われていないのは、インダスから初まった習慣なのである。

樹木崇拜は釈迦にもかなりの影響を与えたと思われる。

釈迦が悟りを開いたのは菩提樹の下だといわれているが、その菩提樹はピツパル樹といい、インダス文明の土器の文様に残されている。もともと菩提樹は、ピツパル樹という名であったが、釈迦がその木の下で悟りを開いたため、菩提樹と仏教徒の間ではいわれるようになったのだ。

釈迦が菩提樹の下で瞑想をしたのは、インダスの宗教のなごりが残っていたからだと思われる。

又、ヒンデウ 教においてもピツパル樹は神聖な樹木である。

それにヤクシー、ヤクシャ崇拜も樹木崇拜からきている。

ヤクシャとは仏教では夜叉のことで、もともとは樹木の神様のことであった。

又、ヤクシャは男神でヤクシ は女神のことである。

性器崇拜は日本の縄文文化とよく似ている。

インダス文明では、リング（男根）、ヨーニ（女陰）崇拜が行われ

ていたが縄文文化も同じようなことがおこなわれていた。

又、日本の安産石に対応するものがハラッパー遺跡にも残っていた。リングは、ヒンデュー教ではシバ神を指しているので、シバ神の原型はインダスに発していると思われる、その証拠となるものが、インダス文明の遺跡から出土した物の中に数多くある、印章の中に認められる。

証拠となる印章とは、シバ神の原型と思われる像が刻されているもので、その姿は、威厳にみちた人物が、台座の上で足を前方に曲げて組んで坐っていて、頭に角をもち、腕に多くの腕輪をはめている。そしてその人物のまわりには、水牛、象、サイ、虎が取り巻いている。

シバ神とは、ヴィシユヌ神と並んでヒンデュー教の二大神（柱）である。

シバ神は獣王ともいわれているので、動物が取り巻いている像は、まさしくシバ神の原型といえるだろう。又、台座の上で足を前方に曲げて組んで坐っている姿はヒンデュー教のヨーガー、仏教の禅の原型といえる。

釈迦が菩提樹の下で禅を組み悟りを開いたという様は、まさしく、インダスの宗教を釈迦が取り入れたといえるだろう。

釈迦が苦行を六年間した後、その苦行が意味の無いものだと棄て去ったということは、それまでのバラモンの修行を捨て、古くて新しいインダスの修行を選んだのだと私は思っていたが、その辺は本品で詳しく述べたいと思う。

動物崇拜に関しても、日本とインドスはよく似ている。

日本の神社では狐や蛇等を祭っているところが多いが、インドスでも動物を神として祭っていたのだ。

又、インドス川の鱒わにの信仰が日本に渡り金比羅信仰となった。

動物ではないが土俗神クベーラも日本で毘沙門天に変わっている。

インドスの文明が滅んでアーリヤ人が、ガンジス河流域に進入し、国造りをする、当然アーリヤ人の宗教が（バラモン教）国を支配するが、インドスの宗教も民間宗教として残った。その宗教の形態は日本の神社と同じようなもので、土地や村に密着し、樹木や地母神、岩、動物等を神として祭っていたのだから、本当に日本とよく似ている。

卍（左マンジ）は地図上での寺の記号だから仏教と深い関わりがある字だと誰もが良いイメージを抱くだろう。

逆に右マンジ はナチスドイツのハーケンクロイツをイメージして悪いイメージを抱くと思う。

もともとはどちらも同じ意味だが、左マンジは女性原理で右マンジは男性原理を表現するという説もある。

インドでは常に右は尊く左は汚れているという思想がある。

右手で食事をし、左手で水を使いお尻を洗うということや、偏袒右肩等はそれである。

卍^{マンジ}に関しては様々な意味がいられているが、代表的なものは、蛇神、
ヴィシユヌの輪宝、太陽のシンボル等があげられる。

又、ナチスはこの旗、右マンジのもとユダヤ人を虐殺したが、マン
ジの起源はユダヤ人のセム族にあつたらしい。

つまり、もともとユダヤ人の紋章を、ナチスは喜んでつかっていた
というわけなのである。

ひにくである。

インダス文明は滅んでしまつたが、その文明で生まれた宗教や文化
はガンジス河流域に流れていき、仏教やバラモン教（特にヒンデウ
ー教）に多大な影響を与えた。

巫女（みこ）こそナンバーワン

アーリヤ人はインダス河流域から紀元前千年頃ガンジス河流域に進出していった。

各地で戦闘がおこったがガンジス河流域全てをアーリヤ人が征服したわけではなかった。

ある国ではアーリヤ人の治める国、又ある国では先住民の治める国、又ある国はアーリヤ人と先住民が一緒に国を治めるといふように、様々な形態が造られ、仏伝では十六大国があつたという。

アーリヤ人がガンジス河流域の指導権をとると、バラモンの力が強くなっていくのであつた。

バラモンとは、アーリヤ人がつくりだした人種差別の最高位の位である。

その人種差別をカースト制度と現在では呼んでいる。

もともとはヴァルナという呼び名が使われていた。

ヴァルナとは色という意味でアーリヤ人の皮膚の色が白で、先住民の皮膚が主に黒だったことから、皮膚の色で差別をしていたのだが、次第に階級により差別がおこなわれるようになった。

人が集まり村を造り、村が大きくなって都市になったり国になったりするがその大きくなる過程で力を持つ者は誰であろうか ほとんどの人は、力を持った者、つまり武力を持った者と考えるだろうが

そうではない。

武力は、ほとんどの時代二番目なのである？

一番目は霊能者すなわち巫女が力を持つ場合が多い。

巫女と漢字で書くところと怖いイメージがあるが神子、皇女、皇子ならば一番目というのも頷けると思う。

日本でも卑弥呼ひみこへ卑弥呼という漢字は魏（三国時代の中国の三つの国のうちのひとつ）でつけた漢字なので蔑んだ漢字がつかわれているが、ヒミコの本当の意味する漢字は、火神子もしくは日神子だと考えられる。そして、邪馬台国（この漢字も蔑んだ漢字である）の女王であったといわれている。

卑弥呼という名は個人名ではなく社長などと同じで役職名ではなかったかなと思われる。

ヤマタイコクも普通に考えれば大和の国と読めると思う。

日本の言葉を中国の当て字で書くという意味が違ってしまふ場合が多くあるが、これもその言い例だと思う。

バラモンにしてもブラーフマナやブラフマンを漢字にしたら婆羅門となるのだから意味が大きく違ってしまふだろう。

卑弥呼は当然巫女であった。

天皇も天（神様の世界）の巫女ということなのである。

つまり、国造りの始まりは、神の代理人たる巫女（女とは限らない。元々は神子ということだから）が政治のトップに立つということ。武力を使う者達は、その下に置かれるのであった。

ただ日本の場合、武の力が強くなり、武で国を造った時代に武に特別な意味を持たせようとして歴史書をつくったとも思われる。

神武天皇、天武天皇は、天皇時代の幕開けの天皇である。

それぞれ神の武、天の武の天皇ということ。武というものが特別な意味となっている。

しかし武がナンバーワンになるのは国が成熟してからのことで、たいていの国造りは巫女がナンバーワンになる。

アーリヤ人の世界でもそれは同じで国造りの始めは巫女がナンバーワンであった。

神がかりになった人間が神の言葉を述べて村や国の決定をする。

例えば戦をしるとか、土地を離れるというような大きな決定事項から、物を盗んだ者を罰するとかAとBの結婚を許す等というような日常的な事まで巫女が神の意思で決めるのだから誰も巫女には逆らえなくなるだろう。

へたをすれば村の長や国王も巫女が神の意思として決めてしまうから、巫女がナンバーワンになるのも理解できると思う。

アーリヤ人の世界で、個人的だった巫女もだんだん組織的なものになっていく。

それがバラモンの登場であった。

南口シアの地にアーリヤ人が住んでいた頃、バラモンはまだ巫女であり、神がかりになって神の言葉を述べていたのだが、神がかりになるため、ソーマ酒という物を呑んでいた。

ソーマ酒とはベニテング茸を加工した飲み物だったらしい。

らしいという表現をするのは今では、はっきり分からないからである。

ただ幻覚作用を起こす物だったことはたしかなようだ。

ベニテング茸は笠の表面が真赤で粒粒がかかっている。

白雪姫の絵本の中で森の中に出てくる茸はこのベニテング茸を模写しているのが多いから思いだす人もいるでしょう。

このベニテング茸は典型的な毒きのこです。

毒といっても死ぬような毒ではなく、幻覚を起こさせる毒なのでアーリヤ人の巫女はそれを呑み神の言葉を述べたのだろう。

普通巫女となるには簡単になれるものではないし、誰もがなれるものでもない。

それに特別な人間しかなれないから、一つの国に沢山の巫女が存在することは難しい。

しかし、ソーマ酒という一種の覚醒剤を使つたら沢山の巫女が出現してもおかしくはない。

真のバラモン

アーリヤ人が北西インドを占有した時には、すでに沢山のバラモンが存在し、バラモンが王より力を持ちトップにいた。

しかし、インドにはベニテング草がなかったので変わりのものを代用したらしい。

又、この頃になるとヴェーダが生まれていたので覚醒しなくてもバラモンの権威を守れたのだと思う。

それはどういふことかというヴェーダを唱えればそれが神の声と一緒にだという事になったからだ。

ヴェーダの出現によりバラモンの地位と権威が守られ、一つの特権階級がアーリヤ人の世界に生まれた。

神がかりになる能力が無くてもヴェーダを覚えればバラモンになれるのでバラモンの地位は親から子へと引き継がれていった。

いわゆる世襲制である。

そのためヴェーダは秘密の言葉となり、親から子へと引き継がれていく存在となっていた。

釈迦は「生まれによってバラモンとなるのではなく、行ないのいかんによってバラモンと呼ばれ得るかどうかが決まる」と言ったが、バラモンは生まれによってしかなれなかった。

バラモンの本来の意味は梵天の声を聞くものという意味なのだが時代とともにヴェーダを唱えるものと変わっていった。

「ヴェーダは神の声だからそれを口にすることは梵天と同じ位置にいるバラモンでなければならぬ」と言うのがバラモンの主張であるが、釈迦の時代、バラモンとは梵天の声を聞くものという存在だから、その能力があれば誰でもなれるという考え方が生まれた。

もともと巫女からバラモンが生まれたのだから、バラモンとは本来その能力を指すのが当然なのだが、時代と共に能力ではなく生まれに変化していった。

そのため釈迦の時代、真のバラモン、理想のバラモンという言葉が世にでてきた。

「理想のバラモンがブツダなのである」

という言葉も使われるようになる。

釈迦の時代バラモンは、あこがれの存在だったのだ。

現代でいうと仏とか如来という尊称が釈迦の時代バラモンだったのである。

釈迦滅後、仏教がバラモン教に負けないぐらいの勢力になった時、真のバラモン、理想のバラモンという言葉は仏教教団の中では使われなくなり、それに変わって仏とか如来とかという言葉が使われるようになったのだ。

現代でも、新しい仏教系教団が生まれると「私は仏であり、如来で

ある」なんて教団の最高責任者が言うが、その教団が大きくなり、釈迦や仏教に依存しなくてもよくなったら新しい尊称を使い、仏や如来という言葉捨てるだろう。

仏教教団もそのような道を通り、真のバラモン、理想のバラモンという言葉捨てていった。

しかし釈迦の時代、釈迦は真のバラモンを目指し修行をしていたのである。

このようにバラモンとは古代インドでは絶対的存在であった。

だから古代インドのガンジス河流域はバラモンの国と呼ばれていたであり、バラモン教という宗教が国を支配していたのである。

ガンジーはカースト制度に挑戦した

バラモンは自分達の位置をより確固たるものにするため、カースト制度を作っていく。

もともとこの人種差別は侵略したアーリヤ人が先住民を差別するためにできていったので、アーリヤ人と先住民（ダーサと呼んでいた）の差別しかなかった。

しかしバラモンがアーリヤ人を、バラモン、クシャトリヤ（王族、武士）ヴァイシャ（農民、商人）の三つに階級を分けた結果、四種のカースト（バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、シュードラ）が生まれた。

カーストが生まれると血筋が生活の基本となつていった。

つまり、人は生まれにより職業が決まってしまうのであった。

バラモンの家に生まれたらバラモンになり、武士に生まれたら武士になる。

大工は大工にしかねず、農民は農民にしかねなかつたのである。

そしてその差別は徹底していてカーストが違えば一緒に食事をとることさえできないのである。

勿論カーストの違う結婚なんて論外であった。

しかし、どれだけ厳しい制度でも、それを破るものがでてくる。

身分が違っても美しい女性があらわれたら手に入れたいと思うのが男の性さがだろう。

特に男は妻を何人も持てたので、第一夫人は同じカーストでもそれ以外の妻を他のカーストにすることがあった。

カーストの違う性交によりできた子供はカーストの低い方のカーストになったり、新たなカーストが作られたりした。

新しいカーストは個人対個人だけではなく、村と村がくっついてできたこともあった。

例をあげれば、ギリシャ等西方の民族とシュードラがくっついてヤヴァナ族という村ができたということもあったのだ。

又、職業別にもカーストはつくられていった。

現代ではそのカーストが二千から三千種もあるといわれている。

インドの人種差別は現代のインドの大問題のひとつである。

四種のカーストの下に「チャンダーラ」旃陀羅せんたらという犬や豚と同じに扱われた不可触民が作られ、その存在は古代インドから現在まで続いている。

インド独立の父ガンディーは不可触民救済運動を始め彼らを「神の民」と呼んだ。

現代のインドでは法律的に差別はなく平等であるが、現実的にはそ

れが守られているとは思われない。

現代では不可触民は「指定カースト」と呼ばれ、その人口は一億人以上を超えている。

現在も古代インドもカーストの最上位はバラモンである。その歴史は三千年以上続いているのだからバラモンという存在の凄さに驚く。

古代インドの奴隷は現代のサラリーマンと同じ

バラモンは宗教によりトップに立ったが、国が成熟し都市が出現する頃になるとクシャトリア（王族）が力を持ちはじめ、さらに成熟すると、商取引が活発になりヴァイシヤ（商人）が力を持ちはじめた。

その頃になるとバラモンの権威は薄れはじめ、バラモンといえどヴァイシヤより惨めな暮らしをしているものもではじめた。釈迦の時代は丁度その頃である。

四種のカーストを説明すると、バラモンは司祭、宗教を司るもの、クシャトリアは王族、武士である。

この二種は説明しなくても分かると思いますが、ヴァイシヤとシュードラはちよつと説明しなければ理解しづらいと思います。

ヴァイシヤは農民、商人ですが彼らは自ら働きません。シュードラを使いそれを統率するのがヴァイシヤなのです。

現代でいうと、会社の経営者とか株主、ビルのオーナー、地主がヴァイシヤなのです。

そしてシュードラは隷民だが現代人が考えているような奴隷ではない。

現代の奴隷のイメージは、アメリカにおいてのアフリカ系黒人が奴隷とされた時代の奴隷が、奴隷の姿だとイメージしている人がほとんどだと思いますが、古代インドのシュードラはそれほどひどくは

ありませんでした。

シュードラといってもちゃんと給料を貰っていたのです。

使われる身をシュードラといったのです。

現代でいうとサラリーマンがシュードラにあたるっていいでしょう。

シュードラは働いてさえいれば生活が保障されるので、わりかし良い身分だったのです。

だから征服された先住民は自ら希望してシュードラになろうとしたのです。

シュードラに入らなければ四種のカーストに入ることができず生活も保障されません。

だから征服された先住民は、生活の保障のためシュードラになろうとしますがプライドの高い先住民やシュードラになれない先住民もでてきます。

そういう人間は何を職業とするのかというと、それは手工業者です。

職人は奴隷より身分が低かった

手工業者とはいわゆる職人、工業人です。籠づくり、陶工、織物、理髪師、木工、竹細工、皮革工等です。

日本は職人の地位が、中国やインドにくらべ高い位置にあるので職人の地位が奴隷より下なんて考えもつかないだろうが、それは日本が世界の常識とは違う価値観を持っているからです。

日本は昔から技術に関しては価値を認める国であった。

江戸時代、土農工商という身分制度があったが、その身分制度では工業人は商人より身分が上なのである。

日本人である我々は「あたり前だろ、商人は物を作ったり、加工したりしないで、誰かが作ったものを利用して金を儲けているいやつらなんだから」なんて言いそうですが、それは日本人の持っている価値観なのです。

職人を大事にする日本の風土が現在の技術国日本を造ったのです。

しかし、お隣の韓国、中国、インドは職人を蔑んでいたのです。

現在はそんなことないでしょうが、民族意識の中には残っているかもしれません。

古代インドで手工業者より下の階級は屠牛者、屠羊者、屠豚者、捕鳥者、養鳥者、漁師、猟師、養犬者（犬を使って猟をする者）のよ
うに動物の命を扱うもの達であった。

そして主に彼らをチャンダーラと呼んだ。(チャンダーラの職業は時代によって変化はする)チャンダーラの階級位置は、盗人や盗賊と同じくらい低いものであった。

日蓮が言った「私は 梅陀羅の身です」との言葉に、どういう意味があるか、この説明でよく分かったのではと思います。

それにしても古代インドは現代日本とよく以ている。

世の中は支配階級が握り、一般人はサラリーマンを目指す。

サラリーマンが嫌な人間は職人の道を選ぶなんて、まったく同じである。

又、能力のある人はサラリーマンを辞め自ら経営者になるという事と同じような事も古代インドにはあった。

古代インドではカ ストを上げる事はできないが自分の地位を上げることができた。

シュードラでも力のある者は人を使い経営者になって成功する者もいたのだ。

バラモンのが弱くなった時代シュ ドラがバラモンを雇うなんていうこともあった。

日本でも武士の力が強くなり、貴族の力が弱くなった時代、身分は上でも貴族が武士や商人に頭があがらなかったということがあったがそれと同じである。

マヌ法典

バラモンは国が成熟してない時代、絶対的な力を持っていたが、国が成熟するに従いクシャトリヤ、ヴァイシヤに権力が移行していったのである。

しかしバラモンが宗教の力を使ってインドの国を支配したのも事実で、インドス文明では武力で先住民を支配しようとしたが、ガンジス河流域に進出していったときは武力だけではなく、バラモンの力で支配した国も多くでた。

バラモン達はガンジス河流域だけではなくインド全体にもでていき、その宗教によってアーリヤ人の優位性を示した。

それはまるでヨーロッパ人が世界に進出したようにした時、まずキリスト教がアジア、アフリカ、アメリカに布教したということと以ている。

後世の『マヌ法典』では四種のカーストの特性をこう述べている。

バラモン ヴェーダの教授、ヴェーダの学習、自分のために祭祀を行なうこと、他人のために祭祀を行なうこと、施与、布施を受けること。

クシャトリヤ 人民を保護すること、施与、ヴェーダの学習、感官の諸対象に執着しないこと。

ヴァイシヤ 家畜を保護すること、施与、自分のために祭祀を行なうこと、商業、金貸業、耕作。

シュードラ バラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャの三つの階級に
対して、奉仕すること。

『マヌ法典』は紀元前一世紀から紀元二世紀の間に成立したから釈
迦の時代より

三百年も後の時代であるが四種のカーストの特性をよくとらえてい
ると思う。

物欲にはまる坊主は本当に仏教者

釈迦の時代バラモンの地位はクシャトリヤやヴァイシャに取って代わられていた。

農業技術が進み農作物が豊富になると、余った作物は流通に回される。

そうなる と必然的に商いは活発になりその結果、商人が力を持ち始めるのであった。

商人が力を持ち始めると、その世界は物があふれ、物の欲が人々を支配する。

物の欲はヴァイシャのカーストだけではなく、他のカーストの人も持つようになり、それはバラモンも同じであった。

「祭祀を行ない、神と同等 のバラモンが物欲を持つなんて」
人々はバラモンに疑いを持ち、

「物欲をもつバラモンは本物ではない。真のバラモンは物欲など持たない」

と理想のバラモンを追い求めるようになる。

現代の日本の現状で考えてもその辺は理解できると思う。

日本がバブルになった時、人々は金、土地、家、車、株、ゴルフ会員権等にむらがり、それこそ物欲の世界であった。

商売人がバブルにはまるのは理解できるが、寺の坊主や宗教団体が

物欲にはまり、バブルにはまるのをみたとき、彼らは真の仏教者、宗教者ではないと誰もが思うだろう。

それと同じ様なことが釈迦の時代、バラモンに対して大きく問われていたのである。

釈迦の時代よりすこし前の時代あたりから理想のバラモンの定義がつくられていた。

それは『森の中で暮らし苦行をして生き、その後、乞食をし、命の尽きるまで諸国を歩き回る』ということ、その様な生き方をしてるバラモンを仙人とか聖仙と呼んだ。

物欲の世界を嘆き聖仙に憧れをもつ者はバラモンだけではなく、他のカーストにもおよび、聖仙の生き方をまねしようとする者もでてくる。

バラモンは宗教者であるが家庭も持っているのが普通である。

親から子へとヴェーダを受け継がさせバラモンの特権を譲るのだから家庭は絶対の必需品である。

そのため子供に全てのものを引き継がさせてからではないと森の中での暮らしができないのが当然であろう。

そのため理想のバラモンの生き方を、梵行期（学術期）、家住期、林棲期、遊行期の四つに分けた四住期という生き方が生まれた。

この四住期を簡単に現代風に説明すると、生まれてから結婚するまでの間、社会から学ぶ時期を梵行期（この社会と言う表現は当時は

バラモンの祭祀やヴェーダーのこと）。

子供を育てて社会に貢献し、長子に跡目を継がせるまでを家住期とし、

残りの二つは前に記したとおり森の中の苦行と諸国の遊行である。

この四住期はバラモンの目指す生き方であったがしだいにクシャトリヤ、ヴァイシヤにも浸透していった。

そしてこの生き方を目指す若者が多く出始めるのが、釈迦の時代よりすこし前の時代だったのです。

この生き方を目指し森の中で苦行したり諸国を遊行する者を出家者と呼ぶようになったのである。

もともとバラモンが森の中で暮らしたり、緒国を遊行するのはかなり年を取ってからなのだが出家者達は若くして家をでる者も多かったようだ。

釈迦もそれに刺激され若くして出家したのだと思う。

釈迦の時代、古代インドは熱気に包まれていた時代で、都市がつかられ、商いが活発になり、人々は物欲に翻弄され、そのような世界で自分の生き方や世の中の生き方に疑問を持った人々が、出家という新しい生き方にひかれていったのである。

そして新しい生き方を導いたものにヴェーダのウパニシャッドがある。

ヴェーダが古代インドの歴史書だ

『ヴェーダ』一般の人にはまったく馴染みのないこの言葉。

しかし、仏教やヒンデュー教等、インドで起こった様々な宗教には全てヴェーダが関わっていたといっても過言ではない。

それどころか古代インドの歴史はヴェーダによって説明されているのだ。

古代インドの歴史はヴェーダを研究することにより明らかにされている。

そして釈迦の時代あたりからは仏教、ジャイナ教、ヴェーダを研究することが古代インドの歴史であった。

皆、宗教書であるが、中身をよく調べると社会生活や社会の出来事と思われることが述べているので、結構どんな暮らしをしていたか、どんな事件があったかということがわかるのである。

それではヴェーダとはどんな宗教書だったのだろうか（古代インドの宗教は全て口伝だったので正確には書ではないのだが、後世、口伝のほとんどの教が書となったので、ここではそういう事にこだわらない）

ヴェーダといえばリグ・ヴェーダ

ヴェーダにはサンヒターとしてリグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダ、アタルヴァ・ヴェーダがあり、サンヒターとは別にブラーフマナ、アーラニヤカ、ウパニシャッドがあると書けば、ほとんどの人は何の事か分からないだろう。

なじみのない言葉をいくら説明しても頭には入らないものです。

それぞれのヴェーダについては一冊の本になる程内容があるのですが、ここではそのことについて説明するのは、あまり意味がないので、ヴェーダの移り変わりを説明しておきたいと思います。

最初にできたヴェーダは、先にも書いてあるとおり、リグ・ヴェーダである。

リグ・ヴェーダは神の讃歌の集成で千十七（補遺歌十一篇を加えると千二十八）もの讃歌でできている。

神の讃歌とは神様はすごいという事を歌った詩ということです。

例えばアーリヤ人を現しているというインドラ神を褒め称える詩としてこんな詩がある。

『インドラは、肩を拡げたる・最も頑強なる障碍・ヴリトラ（「障碍」、蛇形の悪魔）を殺せり、偉大なる武器ヴァジュラによって。斧もて伐り倒されたる木株のごとく、アヒは大地の上につつ伏に横たわる。』

この詩はインドラに関しての代表的な詩だが、他の詩もこの詩と似たり寄ったりで、インドラは強くて悪魔をやっつけてしまおうというような内容がほとんどである。

インドの神様は時代やその時の宗教によって善神が悪神に変わったリ、トップにいた神様が下の方に落とされたりする。

それはインドに限ったことではないが、インドは歴史が深いので、そのような変動が他の国よりも多く感じる。

インドラは仏教で帝釈天という日本でも馴染みの深い神様に化する。

帝釈天は須弥山の天上にある三十三天に住み、その四方は四天王が守護している。

帝釈天は天界の王様だが、仏教の守護神でもある。

日蓮の顕した曼荼羅には、梵天と対するように帝釈天が書いてある。

仏教では、結構良い位置に帝釈天はいるようにみえるが、所詮、守護神であって、主役ではない。

仏教の主役はあくまで仏と菩薩である。

ところがリグ・ヴェーダにおいてインドラは最高神なのである。

並み居る神様の中でトップなのだ。

もっとも時代が下がるにしたがってブラフマン（梵天）の下になり、

ヴィシュヌ神の下になっていく。

しかし、アーリヤ人がインドに侵入した時の最高神は戦いの神インドラ神なのである。

アーリヤ人はもともと遊牧民なので、とても火を大事にしていた。

そのためインドに定住するまでは火の神様アグニ神を大事にしていたが、インドの先住民と戦闘が起こると戦いの神様が一番になった。

ここで先程のせた詩をよくみて下さい。

むずかしくて何が書いてあるかわからないと誰もが言いそうですが、意味のわからない言葉が理解できれば、なんとなく意味は分かると思います。

まず、最初にでてくるインドラは、何度も説明しているように最高神であり、アーリヤ人のことです。

そしてヴリトラとアヒは広い意味で先住民のことですが、ヴリトラは、せきとめるものという意味があり、インダスの先住民が作った人造湖ではないかという説もある。

ヴァジュラはこの詩にも書いてあるとおり武器ですが、この武器は鉄の刀を意味しています。

古代インドの先住民は青銅の刀を使っていたので鉄の刀にはどうしても負けてしまいます。

だから、簡単に斧で木を伐るがごとく、先住民はやられてしまった

ということなのです。

ヴリトラを人造湖と考えるならば、ヴァジュラで人造湖をこわしインダスの都市を水浸しにしたとも考えられます。

仏教ではヴァジュラを金剛杵と訳している。

又、ヴァジュラは雷を意味しているのでインドラは雷の神様だという一面もあります。

このインドラ、ヴリトラ、ヴァジュラ、アヒの意味が分かればこの詩もなんとなく理解できると思います。

つまりアーリヤ人が青銅に勝る鉄の武器をつかい先住民を簡単にやっつけてしまったという詩なのです。

リグ・ヴェーダはこのような詩の集まりで、特にインドラの詩はほとんど戦いの詩であり戦勝の詩であります。

そのためインダスの戦いでモエンジョ・ダローやハラッパーを壊滅させたと思われるような詩もリグ・ヴェーダにはある。

リグ・ヴェーダの特徴の一つはインドラ神における戦いの詩であり、讃歌全体の四分の一がインドラの詩である。

リグ・ヴェーダから日本にきた神様

リグ・ヴェーダがつくられたのはアーリヤ人がインド（インダス文明）に進入して、あちこちに戦いをしていた時だから、インドラ神が崇められるのは当然といえるだろう。

インドラ神以外にも、リグ・ヴェーダはギリシャ神話と同じ様に多くの神様が登場する。

その神様達の中に仏教と縁する神様がいたのでここに紹介しようと思います。

？ヴィシヌ神はヒンドウ教の主要神だが、リグ・ヴェーダにもたった五篇だけがある。そのうちの一篇をここに紹介する。

「われはいまヴィシヌの雄々しき偉業を宣べよう。かれは地の領域を測量し、上方の集いの場所（天界）を支えた。歩みの幅ひろき「かの神」は三步で 歩して。」

この詩の中に三步という言葉がでてくるが、バリの物語でもヴィシヌ神が三步あるきバリを地下世界に押し込めたのを覚えていると思います。

このヴィシヌ神の特徴、三步はリグ・ヴェーダからあったのです。ヴィシヌ神は、太陽の運行のシンボルであった。

そのためヴィシヌ神の三步は天、空、地ということになるのである。

ヴィシユヌ神はリグ・ヴェーダではたいしたことのない神様であったがブラーフマナ神話では重要な神となりヒンドゥー教ではシバ神と並んで最高神となり、仏教では毘紐天となった。

？サラスヴァティーは西北インドにあった大河の名前であったがリグ・ヴェーダでは河川、湖の女神となり、弁舌、財富の神となった。やがて智慧弁才の神となり、日本に来て弁才天となった。だから弁才天の社は水辺にあるのだ。

弁才天が日本固有の神様だと思ってた人は多いと思います。

ところが初まりは古代インド、リグ・ヴェーダにあったのです。

水の神様といえは水天宮の水神も、もともとは古代インドのヴァルナ神から初まっています。

どの神様も仏教を通して日本に入ってきた神様達なのです。

南無（なむ）もリグ・ヴェーダが始まり

神様ではないが仏教の中の浄土教もリグ・ヴェーダとは関係がある。

リグ・ヴェーダでは神様を礼拝する時ナマスと表現する。

このナマスは漢訳すると南無となる。

又、リグ・ヴェーダの時代、神の名を称えると功德があると考えられていたから、南無阿弥陀仏と唱える行為と同じ行為はリグ・ヴェーダの時代にはもうあったということであろう。

浄土教で一番有名なのは四十八願であるが、その中の第二十六願にナーラーヤナ神がでてくる。

この神様はヒンドゥー教の神様であるがリグ・ヴェーダにもその名はでてくる。

このようにリグ・ヴェーダと仏教はかなりの繋がりがあったのです。

初めてこのような事を知った人はとても驚くと思います。

しかしそれは、日本の仏教が大乗仏教のため、釈迦の時代から遠く離れた時代（紀元前後）にできた教が仏教の全てだと教えられてきたためなのです。

大乗仏教を学んだ人にとって釈迦をゴータマさんと呼ぶなんて考えもつかないし、発想もでてこないだろう。

釈迦はアンギラスと呼ばれていた

釈迦の呼び名でゴータマさん以外に、リグ・ヴェーダと繋がってる呼び名もあります。

それは、アンギラスです。釈迦は「アンギラスよ」とも、呼ばれていたのです。

「アンギラスなんて怪獣の名か」と昔のゴジラ映画のファンなら言いそうですが、この名は、リグ・ヴェーダではアグニ神（火の神様）の呼称だったのです。

しかしもとは、仙人の名だったから、釈迦がその名で呼ばれてもおかしくはないのです。

ここまでリグ・ヴェーダの説明をしてきましたが、ヴェーダはリグ・ヴェーダが分かれれば半分は分かった様なものです。

なぜならサーマ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダはリグ・ヴェーダとたいして変わらないからです。

バラモンに歌手が生まれた

アーリヤ人がまだインドに侵入しなかった頃、霊的能力者は巫女であったが、巫女はバラモンというヴェーダを唱える司祭となり、リグ・ヴェーダを唱え、カーストの最上位についた。

ヴェーダは過去の聖仙が霊的能力により神の声を聞いたものと認識していたので、巫女の言葉と同じとされた。

戦いに明け暮れていた時代は、ゆとりも、余裕も国全体に生まれてこなかったが、時とともに国が安定していく。

そうなると祭も複雑になっていく。

どんなものでも、権威がついてくると儀式は複雑になるだろう。

宗教的儀式となれば尚更である。

儀式が複雑になれば供養の布施も多くなるからだ。

アーリヤ人も古代インドで落ち着いてくると祭祀を複雑化させていく。

リグ・ヴェーダを唱えるバラモンとは別にヴェーダに旋律をつけ歌う歌詠僧が登場する。

その歌詠僧が歌うヴェーダをサーマ・ヴェーダといった。

サーマ・ヴェーダの聖歌のほとんどはリグ・ヴェーダから採ったも

のであった。

祭祀が複雑になると実務を担当するバラモンもでてくるが、そのバラモンを執行僧と呼んだ。

そして執行僧が低音で唱えるヴェーダをヤジュル・ヴェーダと呼んだのである。

ヤジュル・ヴェーダの内容は、リグ・ヴェーダの内容を少し変形させたものだから、なんらリグ・ヴェーダと思想内容は変わらないため、サーマ・ヴェーダと同じくヤジュル・ヴェーダはリグ・ヴェーダと同一のヴェーダと考えていいだろう。

しかしアタルヴァ・ヴェーダは違う。

アタルヴァ・ヴェーダは呪法

アタルヴァ・ヴェーダは呪法である。

全てが呪法というわけではないが、リグ・ヴェーダと明らかに違うところは、ヴェーダに呪法を入れたということである。

古代インドの先住民の宗教には呪法があり、それをバラモンが採用したということであろう。

アーリヤ人は先住民の宗教を最初はとり入れなかつただろうが、次第に取り入れていったのだと思う。

先住民の宗教をアーリヤ人は破壊し、滅することはせず、民間宗教として残した。

釈迦の時代の前後、その先住民の宗教が見直され出家修行者達が入り入れていったが、ガンジス河流域にアーリヤ人が進出した当初も先住民の宗教をバラモンは取り入れたのだと思う。

又、呪法にはそれだけ魅力があつたのも否定できないだろう。

なぜなら呪法の主なものに医療や占星術があつたからである。

呪法はマントラ、マントラは真言

呪法というと、なにか人を呪い殺す呪文だと私達は考えてしまいましたが、それは日本でのお芝居の話で、元々はサンスクリット語でダーラニーといい、それが中国で陀羅尼と訳されました。

法華経陀羅尼品二十六で毘沙門天や鬼子母神、羅刹女が法華経を受持する人を守るため、このダーラニーを唱えます。

ダーラニーが力を持ち守るということです。

しかしこれだけではダーラニーの意味がよく分からないと思います。

一船の人にはダーラニーというよりマントラといった方が馴染みがあるかもしれません。

マントラは真言と訳されました。

真言といえば真言宗がすぐ思い浮かぶはずですが。

あの弘法大師、空海の教えが、真言密教なのは、仏教を少しでもかじった人ならよく分かっていることでしょう。

ダーラニーは靈的な力を持つ秘密の言葉という意味で、ダーラニーを唱えると、病が治る、法を護る、罪を滅する等の力があるといわれ、それが様々な力があると変化していった。

言葉に力があるので、その言葉は中国では音訳しかされなかった。つまりインドのサンスクリット語の発音のまま中国にも日本にも持

つてこられたのである。

有名な般若心経の最後の言葉も真言^{マントラ}です。「掲諦^{ぎやてい}。掲諦^{ぎやてい}。波羅掲諦^{はらぎやてい}。

……」

真言は秘密の言葉だったので仏教では密教として広まった。

平安時代、空海が唐に渡り求めたのが、この密教であった。

そしてその密教を日本に持ち帰ると、天皇を始め、時の権力者達は密教に熱狂するのであった。

なぜなら、力を持つ秘密の言葉を手に入れば、国は栄えるし、病になっても治ることかできる、早^{ひやく}になれば雨を降らすこともできるという様に、密教は実務的で利益のある教えであったからである。

一緒に唐に渡った最澄は空海の弟子にまでなつて密教を学びたいと思つたのだ。

現代では、空海（弘法大師）と最澄（伝教大師）では空海の方が有名であるから、最澄が空海の弟子になつたとしても当然だと言う人が多いと思いますが、平安時代、二人が唐より帰国した時は比べ物にならない程、最澄の方が、格が上であった。

今でいえば有名大学教授と高校教師位の差が二人にはあつたかもしれないし、年も当然、最澄の方が上である。

普通なら空海が最澄の弟子となり、密教を最澄に差し出してもおかしくはないのに、密教がそれをさせなかった。

なぜなら密教は呪法だったからです。

そしてその密教の起源はアタルヴァ・ヴェーダに求める事ができ
し、アタルヴァ・ヴェーダは先住民の呪法をとり入れる事により完
成したのである。

呪法は民間療法みたいなものだった

現代の様な医療とか科学が無かった古い時代は、病気は全て神や霊の領域であつた。

病気になるのは、悪い霊が身体に憑いたからだとか『病気を癒し、呪詛から解放せらるるための呪文』を使つたり、『頭髪を増進するための呪文』とか『恋仇の女子を呪うための呪文』等の様なユニークな呪文もあつた。

呪文（タントラ・真言）の力により悪霊を追い払つたり、長寿や健康を得ようとしたのである。

今はやりの陰陽師や祈祷師等もこの流れである。

病気になる、悪い事ばかりおこる、ケンカばかりしている等の悩みを持つと、悪霊の仕業だと思つてしまう人は現代でも数多くいる。

それが古代なら尚更であらう。

先住民族の宗教は呪法や占いもあり、まるで現代日本とよく似てい

る。
現代でも病院で治らない病気は民間療法（先住民族の宗教・呪法）
に頼る人が多勢いるだろう。

それと同じ様に先住民族の呪法は人気があり、ヴェエダの中に取り入れざる得なかつたと推測できる。

しかしアタルヴァ・ヴェーダはリグ・ヴェーダ、サーマ・ヴェーダ、ヤジュル・ヴェーダに比べ長い間ヴェーダ聖典としての権威を認められずにいた。

それは今の民間療法が、医療として認められないというのと以てい
るだろう。

しかし、そんなアタルヴァ・ヴェーダも、仏教興起の前後の時代にはヴェーダの一つとして認められる様になり、四ヴェーダの仲間入りを果たした。

この四つのヴェーダが本集といわれるヴェーダで、その本集に付随するものにブラーフマナ、アーラニヤカ、ウパニシャッドがある。

三蔵法師って誰？

ブラーフマナとは祭式の説明書である。

仏教には法（教）蔵、論蔵、律蔵、という三蔵というものがある。

法蔵とは釈迦の教え、教の事である。

法華経とか般若経等がそれである。

論蔵とはその教の説明書である。

現在、色々な経に対し、様々な人が説明していますが、広い意味でそれらも論蔵となるのです。

日本の過去においても聖徳太子や日蓮が法華経を独自で解釈し説明した書がありますが、それも日本の論蔵ということです。

つまり論蔵とは色々な人が説明しますから沢山の教ができるということことです。

律蔵とは戒律を定めた教えで、仏教徒は肉をたべてはいけなとか、ウソを言ってはいけないというように、してはいけない法律みたいなものです。

この三蔵をインドから中国に持って帰る人を三蔵法師と言ったのです。

有名な孫悟空の西遊記にでてくる三蔵法師はこれを意味するのです。

説明が長くなってしまいました。この論蔵の様なものがブラーフマナということなのです。

説明書（論蔵）が多く出ると中には哲学的なものもでてきます。

最近、作家の五木寛之氏が仏教を元にした本を何冊かだしています。がそれらの内容に哲学を感じるところが随所にでてきます。

説明書のいきつく先は新しい哲学なのです。

そしてヴェーダもその様になりました。

それがウパニシャッドなのです。

アーラニヤカはブラーフマナからウパニシャッドに至るまでの引継ぎのヴェーダといえるでしょう。

だからアーラニヤカはブラーフマナによる説明と、ウパニシャッドによる哲学両方がふくまれているヴェーダだといえるのです。

アーラニヤカは森林という言葉からきたものでその名のとおり村落のなかで説いてはならないとされ、森林の中で説かなければいけないとされた。

そしてウパニシャッドは秘密の教えといわれ仏教やジャイナ教等新しい宗教に多大なる影響を与えた。

リグ・ヴェーダは紀元前千二百年頃から四百年位かけてつくられました。

そして紀元前千年頃から紀元前五百年頃にかけてブラーフマナ、アーラニヤカ、ウパニシャッドが順次に作られていったのです。

ヴェーダの言葉に馴染みがないため、ヴェーダがどういうものかわかりずらかった人もいます。ようは、巫女の神おろしによる言葉から時代が移ると神霊の啓示を受けた聖仙がヴェーダをつくるようになり、時代とともにそれが祭祀となって、祭祀が複雑となり、そのためのヴェーダがつくられ、ヴェーダの説明が生まれ、それが哲学にまでなった。

そして、その最後の哲学となったヴェーダがウパニシャッドということでした。

インドには時間が存在しないのか、意味を求めないのか、ヴェーダや仏教、ジャイナ教等に時間は存在しない。

お経を読んだ人は分かると思いますが、かならず、その時仏は、とか、ある時仏は、で始まるでしょう。

その時、ある時ではいつの時代かわからないのです。

そのため一つの教が何百年もかけてつくられたりするのです。

仏教を勉強する人はその事が分かっている様で分かっていない人が多くいます。

だから仏が一つの経の中でまったく正反対の事を言ってもそれを指摘する人は少ないのです。

時が存在しないから古代インドの年代をリグ・ヴェーダ時代、ブラ
ーフマナ時代という様な時代分けをします。

仏教は古代インド哲学の集大成

世界最古の哲学はギリシャではなくインドであると言わしめたヴェーダがウパニシャッドである。

ウパニシャッドの出現によりヴェーダは巫女的宗教から哲学宗教へと変革、成長していった。

ウパニシャッドが生まれた背景にはアーリヤ人が先住民と共存し先住民の宗教をヴェーダの中に取り入れたからだと考えられる。

先住民の宗教は、人が死んだらどうなってしまうのか、死んだ後ふたたび生まれ変わるのか等宗教に対しての思索があつたようで、その思索をバラモンの聖仙はより深く追究しようとした。

輪廻りんね、業ごう、解脱げだつ、ダルマ（法、道）、瞑想めいそう（ヨーガ）等、全てウパニシャッドから始つたか、深く追究されたものです。

輪廻、業、解脱等は仏教独自のものだと思つてた人は沢山いると思います。

仏教は釈迦（仏）の悟りであるため、全ての法が仏よりでていると大乗仏教を信仰していた我々日本人は考えていたからです。

しかし原始仏教は、古代インド哲学の集大成だったのです。

仏教はウパニシャッドを始めとするヴェーダ、そして、釈迦の時代前後に起こる新しい宗教を飲み込んで生まれ、宗教として勝者となつたため、それらの思想を仏教とすることができたのです。

梵（ぼん）我（が）一如（いちによ）

ウパニシャッドで一番の思想は梵我一如でしょう。

この梵我一如という言葉は多くの人が知っていると思いますが、その思想はウパニシャッドから生まれたのです。

この梵我一如という境地を得るために出家者は修行（苦行）をするのでした。

又、この梵我一如に対抗するように、新しく独自の法を説く自由思想家達が生まれた。

そして釈迦もその一人であった。

梵我一如の意味は、梵が梵天^{ブラフマン}、我が全てのものを取り除いた純粹な自分^{アートマン}、その二つが真理（如）の世界ではまったく同じもの（一）だと私は解釈します。

この梵我一如という思想はウパニシャッドの中心的思想ですから後世色々な解釈がでてきます。

そしてそれは、中心的な思想のため難しい解釈が多い。

仏教では梵我一如に対抗して無我という境地をつくりだす。

何かを作るときは無我の境地にならなければだめだ、なんてよく言うでしょう。

その言葉は元々仏教から採った言葉なのです。

この無我の説明は難しい。

無我とは自分が無いということだから自分が無ければ自分が死んだら自分は消滅してしまうのかとも取れてしまう。

梵我一如アートマンなら我アートマンという存在は永遠にあるのだから、死は肉体の死であって我アートマンの消滅ではないとなり、修行して我アートマンを梵天ブラフマンまで高めることが重要となり、死はなんら意味をもたないとなるから気持ちがあんまり安心する。

仏教では輪廻も認めているから無我はおかしいとバラモンから批判もでるが、私は、梵我一如も無我也同じ意味の様に考える。

仏道修行で無我の境地を得るには、禅を組んだり滝に打たれる修行をして自分の中にある我を追いだそうとするだろう。

我を追いだすから無我なのだが、その目的地（悟り）は梵我一如と同じに見える。

では何故、仏教徒達は梵我一如ではなく無我でなければいけなかったのだろう。

梵天、帝釈は仏の守護神

釈迦の時代、梵天は最高神であった。

最高神というより、神々を超えた宇宙の真理そのものであると考えられていた。

修行者は梵天の世界と一体となることを目標に修行をしていたのである。

そして梵天の声を聞き言葉を述べるものをブラーフマナ（その音を漢訳したのが婆羅門。ブラーフマナ 婆羅門 バラモン）といったのだ。

そのためバラモンは梵天と一体だと考えられていたのである。

だから釈迦は真のバラモンをめざし修行したのである。

バラモンの境地を悟ることが解脱であり、輪廻から逃れることであつたためだ。

釈迦滅後仏教教団は発展し、バラモン教と争うほどになった。

仏教の最高峰は仏である。

仏より上の存在はない。そのためバラモン教では最高峰の梵天も、仏教では仏より下の存在にシなくてはならないので、梵天は帝釈天と一緒に仏教の守護神となり、梵天の世界は仏の世界の下に置かれることになってしまった。

そうになると仏教徒達は梵我一如を目指すわけにはいかなくなる。

梵天は仏の下なのだから。

でも梵我一如は捨て去るにはほしい真理でもある。

そこで無我という境地を生み出したのではないかと私は考える。

霊的状态の真偽が問題

古代インドの宗教は人々を救う宗教ではなく、自分を救う、自分のための修行が中心であった。

釈迦の時代はそれが梵我一如であり、仏教ではブツダ、阿羅漢を指していたのだ。

両者とも目指す境地は違うが修行方法は似たようなものだったのではないかと推測できる。

修行の第一はヨーガ、瞑想、禅である。

呼び名は違うが中身は同じ様なものだと思える。

この修行は一種の巫女的境地を目指すものであろう。

巫女的境地になったとき怖いのは魔に襲われることである。

釈迦が菩提樹の下で悟りを開こうと瞑想しているとき、その邪魔をしたのが魔である。

薬や修行、又は神や霊が乗り移って覚醒した世界に入ると悟りを得たような錯覚をおこす。

その世界が真の境地の世界なら問題ないが、そのほとんどは邪霊の世界で修行者を惑わそうとする。

だから釈迦の悟りの時も魔という形で邪霊の世界が表現されるのだ。

その邪霊の世界を見極めるために無我が必要なのである。

我が汚れているから魔があらわれたり、邪霊の世界に入ってしまうのであって、無我ならば仏の世界に入られるのだ。

これは梵我一如でも同じだと思う。我が梵天の世界に入るためには我を純粹にしなければ入れない。

日本神道でもさにわという存在がそれと同じようなものだろう。

神がかりになった巫女の言葉が真の神の言葉か、動物霊等の、神ではない言葉なのか、それを判定するのがさにわなのです。

さにわが「これは動物霊がいわしめた言葉です」と言えば巫女は魔にやられたということだ。

神がかりになったり、霊の世界に入ったからといって、その世界が正しい神の世界（言葉）仏の世界とは限らないのである。

現代の人でも霊能者にみもらった人は多少その事が分かると思います。

霊を降ろす人（女性が多いので私は霊のおばちゃんと呼んでいる）に見てもらうと結構当たる。

「実家に橋が架かってるでしょう」「弟さんの嫁さんは来年家を出て離婚します（二人の仲は破綻していて誰が聞いても離婚するだろうと思える状態）」なんていう事はよく当たるが、持ってる株が暴落した時、「株を売った方がいいか、持ってた方がいいか」なんて

質問には逃げるか、外れるし、「難病を治す先生にはどこにいけばあえるか」なんていう質問の答えも外れる。

自分にとってどうでもよい事は結構当てるのだが肝心な事に関しては、逃げの答えか間違った答えなのだ。

勿論、ずばり当てる霊能者もいるだろう。

霊能者といってもレベルが色々あるのだと思う。

古代インドの修行者も一種の霊能者を目指し神や仏の世界に入いうとしたのだと思う。

しかし、神や仏の世界にはそう簡単に入れるものではない。

当たるも八卦当たらずも八卦のレベルの世界なら現代のレベルの低い霊能者同様、沢山の修行者も入ったかもしれないが、その世界は魔の世界であって神や仏の世界ではないのだ。

だからその世界に入れるのは、よっぽど修行した聖仙でなければ不可能なことだと古代インド人は考えていた。

その様なすごい聖仙が神の世界に行つて聞いてきた言葉だから、ヴェーダは人の説いた法ではなく神の言葉だと思い、古代インド人はヴェーダを神の言葉だと決め付けていたのである。

如の世界に入り仏の法を聞く

釈迦の時代前後、その様なすごい聖仙はバラモンでなければありえないと思つてた人々が、修行をすれば梵天ブラフマンの世界に入れられるという思想が出てきたため出家修行者を目指し、数多く出現した。

修行の始まりは苦行であつた。

断食をする、眠らない、人と会わない、身体を痛めつける等様々な修行があつたみたいである。

瞑想（禅、ヨーガ）もこの頃から修行者が積極的に取り入れたようである。

学者はこの神がかりになる修行にあまり注目していないようであるが、私は古代インドの修行者は、これを目指していたのだと考える。

仏教で「如是我聞によぜがもん」という言葉が経の始めにでてくるが、この言葉は「是かの如ことく我、聞ことけり」と学者は訳すが、私は「如によの世界に我アートルマンは行き、仏の話聞いてきた」と訳したい。

そんな訳、今まで誰も発表した事がないため、まったく私の独断説となりますが、古代インドを考えたとき、それが一番自然の様に思えるのです。

仏教とは全て仏の教えであり、仏が述べた言葉であります。

釈迦の弟子にアーナンダ（阿難）という人物がいました。

彼は十大弟子の一人で、多聞^{たもん}第一といわれていた。

多聞とは多くの話（法）を聞いているという意味で、釈迦の話（法）を一番多く聞いてたということです。

常に釈迦のそばに使い釈迦が老齢になり旅にでた時もアーナンダだけが付き添っていた。

釈迦が入滅したとき、マハーカーシャパ（大迦葉）が釈迦の言葉（法）を残そうと釈迦の弟子を集めるが、そのとき釈迦の言葉（法）を思い出し述べたのがアーナンダである。

そのため「如是我聞」の我はアーナンダだと学者も宗教家も決めつけている。

アーナンダが死んだ後の時代でも、新しく生まれた仏の教えには、『アーナンダが聞いた言葉（法）』を入れれば、つまり『如是我聞』を入れれば仏の法（経）となるという約束ができたと学者はいうが私はそうは思わない。

なぜならその様な事であればレベルの低い教えも数多く生まれ、仏教自体かなり混乱したと思うからだ。

経とかヴェーダは絶対そういう事があつてはならないものであるのだ。

それは物凄い聖仙が最高の修行をして、神の世界、仏の世界に言うて神、仏から法を聞いてこなければならないものなのである。

『如是我聞』の我もアーナンダなら『如是我聞』で良いはずであ

る。

四文字が五文字になるだけである。

我という字は特別な字でアートマンを表すからこの我は梵我一如の
純粹な我アートマンと考えるのが自然だと私は考える。

如とは真理という意味だから如の世界とは真理の世界となる。仏の
ことを如来ともいうが、これは如の世界から来たもの、つまり真理
から来たものということです。

古代インドで真理の世界とは梵天の世界の事でした。

だから本当は如来の事を梵天来でも良いはずですよ。

最も梵天と同じものという意味でブラーフマナ（バラモン）という
存在があるのですから新たに梵天来なんて言葉を作らなくてもよい
のです。

十如是

仏教徒達はバラモン教に対抗するため梵天（真理の世界）と同じ意味だけでも違う言葉を捜し、それが如ではなかったかと私は推測する。

有名な法華経方便品第二で十如是がでてくる。

十如是とは、如是相、如是性、如是体、如是力、如是作、如是因、如是縁、如是果、如是報、如是本末究竟等。という十の如是から始まる法の実体です。

この十如是の書き下しも是^かくの如きのとなっている。

是くの如きの相とか性では意味がわからない。

これが如是の相、如是の性ならなんとなく意味が分かってくる。

如（真理の世界）の相、如の性と続くと真理の世界の姿を説明しているのだと分かってくるでしょう。

つまり『仏の姿（法）は真理の相（表面にみえる姿）を持ち、真理の性質（内面のこと、精神とか心）を持ち、真理の体を持っている。

そして、その体を持っているからこそ、真理の力を持ち、その力を作用させ、真理の因を創る事が出来、真理の因を創れば、真理の縁が生まれ、その結果、真理の結果となる、その結果こそ真理の報われといえる。

それらは全て真理の世界においての事で、初まりから終りまでの無現の時間、究極の世界での事です』
というような意味だと、如の解釈によりできる。

是くの如きの　より、よっぽど意味が分かると思う。

如是の是は是非の是で、肯定を表し、正しいとか、あっているという意味です。

だから如是は正しい真理の世界となり、如是我聞は、『修行をし、自分の存在を極限まで純化させ、無我の境地になり、正しい真理の世界に入り仏の話聞いてきた』となるのです。

これならば釈迦が入滅しても、修行して我を極限にまで純粹にし、無我になり如の世界にいけば、仏（釈迦）の話（法）を聞く事が出来る。

そして聞いてきた話（法）を如是我聞として、経にすれば良いのである。

何百年もかけて作られる経もあるし、経の作者は常に仏ということも、こういう事なら納得しやすいだろう。

古代インドの修行者達は、霊的能力を身に付け神の声を聞く事を目的としていたのである。

そしてその神が梵天の世界となり、仏教者達にとっては仏の世界となっていたのである。

つまり、ヴェーダは神がかりになった神仙が聞いた神の声で、仏典

は、無我の境地になった仏弟子が仏の世界で聞いた仏の法ということとです。

仏教では、目指す境地が仏の世界から仏の覚り（悟り）となり、成仏となっていく。

大乘仏教に入ると信仰宗教も生まれってきたので、救済や浄土（天国）思想もでてくる。

しかし釈迦の時代、修行者達が目指してたのは、霊的能力であり、梵我一如であった。

そして当然、釈迦もそれを目指していたのであるし、初期の仏教徒達も同じであった。

仏教がバラモン教に対抗して、無我、仏界を作るが、中身は同じであったのだ。

ウパニシャッドの梵我一如の思想はそれ故、新しい宗教、哲学の幕開けだったといえる。

オームは聖音・観音は音を観（み）る

古代インドの修行で音というものはとても大事な存在であった。

修行をして梵我一如を目指すのも梵天の音（声）を聞くためであるし、仏教徒が無我を目指すのも仏の音（声）を聞くためである。

バラモンにとって一番大事で重要な音は『オーム』であった。

あの日本を戦慄に落とした宗教団体の名と一緒にあるが、その宗教団体も、このバラモンの『オーム』から名を取ったのだと思う。

『オーム』とは聖音といわれ、ヴェーダを唱える時、最初と最後に唱える（言葉）であり、『アーメン』と同じようなものである。

仏教で一番日本人が親しみを持っている菩薩に観音菩薩がいる。

観音菩薩の正式名は観世音菩薩だが、観自在菩薩という名前も観音菩薩の事を指している。

観音菩薩が好きな人はこの二つの名前があるという事は知っているが、何故二つあるのか知っている人は少ない。

答は簡単でインドの仏典を中国に持ってくるのと当然翻訳をする。その翻訳が人によって違ってたという事です。

観世音菩薩と訳したのは鳩摩羅什くまろし（三四四 四一三）、観自在菩薩と訳したのは三蔵法師の玄奘げんざう（六百（六百二） 六六四）、二人とも仏教を勉強している者にとっては超有名人である。

鳩摩羅什はインド人の父を持ち幼時インドに留学し、仏教を勉強した。

玄奘は仏教を漢訳した人物としてはナンバーワンで、彼以前の漢訳を旧訳と呼び彼の訳を新訳と呼ぶようになった。

彼は大翻訳家であった。

又、彼が仏教の原典を持ち帰ろうと天竺トインの旅行を書いた大唐西域記は、孫悟空の西遊記の原典となった。

二人の観音菩薩の訳が違うのは、梵語の発音のとり方の違いであった。

観世音菩薩の梵語はアヴァローキタスヴァラと呼び、観自在菩薩はアヴァローキテーシュヴァラであった。

アヴァローキタは二人共（見る）と訳しましたが鳩摩羅什はその後あとの言葉をスヴァラ（音）と訳し、玄 はイーシュヴァラ（自在）と訳したので観自在となったのです。

『観音菩薩の音を観みるってどういう事』と思つた人はたくさんいると思います。

自在に観るならなんとなく分かる気がしますから観世音より観自在の方が正解の様な気がします。

しかし、私は観世音の方がインドの考え方の様な気がします。

インドでは今でも太陽を見て（観て）太陽の音を聞くといい修行があるそうです。

何かを凝視する事によりその音を観^{かん}じる修行はインド伝統の修行みたいです。

インド人は音を神聖なものとして、とても大事にしてきました。

その様なインド人気質を考えると観世音の方が納得するのです。

鳩摩羅什はそういうインド人の音に対するこだわりをよく理解していたのだと思います。

鳩摩羅什の訳で観音菩薩の他にも一つおもしろい訳がある。

それは妙法蓮華経の妙法である。

妙法蓮華経の本来の訳は『白蓮のごとき正しい教え』であるため竺^{じく}法護は正法華経と訳した。

竺法護の訳したとおり普通なら妙ではなく正なのである。

鳩摩羅什はこの経に関し、妙な経だなと思いい妙法と名付けたのかも
しれない。

これらの訳の様に鳩摩羅什は正確な訳というより、独自に観じた訳をしたのかもしれない

六師外道

釈迦の時代より少し前の時代から、ガンジス河流域は商業が発達し都市が造られ活気に満ちていた。

国が豊かになってくると出家修行者もふえてくるし、名のある聖仙と呼ばれる出家者もでてきた。

ウパニシャッドの中心的な思想は梵我一如だが、それ以外にも輪廻、業、彼岸、涅槃等の思想も出家者の中心的課題であった。

梵我一如という思想は修行者の目標であったが、輪廻、業、彼岸、涅槃等は修行とは別に、哲学的思想の拡がりを見せ、様々な修行者が独自の説を展開するのであった。

それらの説はウパニシャッドを飛び越える説もあり、バラモン教とは別の教えを修行者におしえるのであった。

バラモンの教えが全てだったのが、洗脳が解けたように新しい教えが生まれたのである。

それらの思想を自由思想と呼び、それらの修行者を自由思想家と呼んだ。

そして釈迦の時代より少し前から釈迦の時代にかけて六人の代表的な自由思想家が世にでた。（仏教では六師外道と呼んでいる）

その中の一人アジタは「人間は地、水、火、風の四元素が複雑にからんで形をなし、死ぬとこれらの元素にどんどん分離されていつて、

靈魂などは存在しない」という唯物論を説く。

この論などは現代物理学と、とてもよく以ていると思う。

勿論、地、水、火、風が物の構成原子と現代物理学は言っていないが、考え方としては同じではないだろうか。

アジタはこの様な説のため、輪廻思想を真つ向から否定し、全ての宗教的行事（葬式とか祭）の無意味を説いていた。

二人目のパクダは、アジタの四つの元素に苦、楽、靈魂の三つを加えた「七要素から構成され形をなしている」と説き、その要素は不変であると説いた。

苦と楽と靈魂も実体的要素の中に入れるのがアジタと違ふところだが、唯物論としては同じである。

三人目のゴーサ・ラは、地、水、火、風、苦楽、靈魂に加え、空、得、失、生、死の五つを加え十二要素を実体とした。

彼は唯物論者ではないが因果応報を否定し、「輪廻は無因無縁に生じるので自分の意志は関係ない」とした。

そのため、輪廻から離れ、涅槃に入るのも人の努力とは関係なく、長い時間、輪廻の中にいればいつか終わりが来て涅槃に入る。

それは糸巻きが、回していればいずれ糸巻きから離れるのと同じであると説いた。

彼は人間の努力と涅槃（悟り）とは別であると説いた。

四人目のプーラナも因果応報を否定した。

彼は「どんなに悪い事をしてても罪はなく、どんなに良い事をしてても功德はない」と説いた。

五人目のマハーヴィーラはジャイナ教（今もインドに残る大宗教）の祖である。

ジャイナ教の成立はとても仏教に似ているところが多い。

そのため、ジャイナ教の教えの一部が仏教にも取り入れられている。

ただ、修行はジャイナ教の方が明らかに厳しく、不殺主戒は徹底していた。

例えば剃髪する時に刃物は使わず手で引っこ抜くのである。

刃物を使うと毛の中にいる虫を殺す恐れがあるためだ。

また、一切何も所有しないというところも徹底していたため、衣服も身に付けず裸行の修行者とも言われた。

このジャイナ教とゴースーラのアージーヴィカ教、そして釈迦の仏教が大宗教として発展していった。

又、パクダとプーラナはアージーヴィカ教と密接な関係を持っており、広い意味でアージーヴィカ教といえる。

そしてジャイナ教のマハーヴィーラもアージーヴィカ教のゴースー

ラとは六年間一緒に修行したので両者の教えには近いものがあつた。最後の六人目がサンジャヤである。彼はウパニシャッドを真つ向から否定した。

ウパニシャッドは「知る事（知）が真埋に至る唯一の武器である」と説くが、サンジャヤはそれを否定したのである。

しかし、その否定の仕方が「その通りだとも考えないし、違つとも考えない」という否定の仕方では否定している事も否定しているのである。

彼の弟子には後に釈迦の弟子となるサーリプッタ（舍利弗）、モツガラーナ（目蓮）がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1656x/>

霊のはなし

2011年12月1日01時46分発行